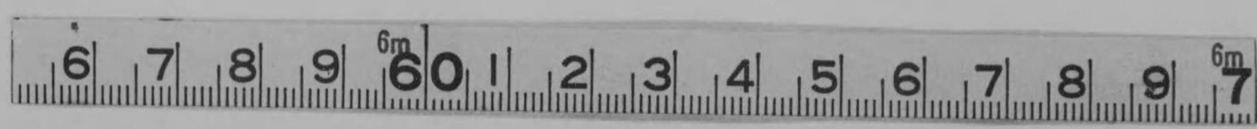
384
147

X 複写



384-147

花も實もある

俠客の戸籍調べ

醍醐惠端著

東京
二松堂書店

大正
9. 1. 19
内交

凡例

一、本書には、德川時代の所謂男伊達衆約四十餘を戸籍調べせるものにして、正確の史料のあるものは、成るべく是を集めて、異說等も間々擧げ、その正否をも述べたり。

二、正確の史料に乏しきものは、流布せる口碑、傳說に從へたれば、他日改訂の時を俟つ。讀者各位にして、御心付の點は著者へ迄御敎示を乞ふ。

三、本書は、文體頗る奇にして、寧ろ戯作に類すと雖も、因果律、勸善懲惡の素志を以つて記せり。

四、本書は、戸籍調べ叢書中の一にして、本叢書は尙ほ續々發行せらるべきものにして、其要旨は、滑稽奇拔の文中に、よく世態人情の實際、研究の平易化、勸善懲惡、因果の法則等を述べんの志にして、高聲は俚耳に入らず、故に寧ろ戯れご

との中に於て弘く強く世を益せんとせるものなり。

自序

大にして小を制し、强者の弱者を壓するが如きは、當然の事實にして、何等の興味を與ふるものに非ず。實に世態の妙味は、豫想外の事件にあり。こは唯に人情の數奇を好むのみにあらず、案外の出來事は、頗る痛快の感を與へ、興味を刺擊するものなればなり。寸小の者にして棒大の漢を一蹴し去らば、誰か快哉を叫ばざらん耶。

世の中に、金にて面を張るものあり。單に面を張らるゝものゝ不愉快のみならず傍觀する者と雖も、小面憎きを覺ゆ。此時、率然として、金にて面を張るものゝ面を逆に張らば、誰か手を拍つて小氣味よしと言はざるものぞ。又若し、七尺有餘の大漢ありて、孩兒の腕を撚らんとする時、却つて他の者の爲に大漢の首を捻り潰さんか、天下の痛快、人情の歡喜、是より過ぎたるはなかるべし。然れ共、この如きは、衷心に仁俠の志を懷き、鐵腸にして火の如き熱情なくんば能くする所にあらず。

而して若し、必に利益を希ひ、行に非仁あらば、その形、仁俠に似て、實は然らざる者なり。昔德川時代に所謂俠客なるものあり、一町人にして、よく市井の間にあつて、强きに抗し、弱を助け、天下の弱者の親分と稱せらるゝものなりき、然も、その大部分は、一種の無賴漢にして、中に屈指のものゝみ、眞の俠客なるものなりて、今にその盛名を唄はる。

本書は、實質に於て、俠客傳の變態なれど、專ら興味を中心として、頗る行文奇拔を極め、而も、よく人情の微を穿ちて、善惡因果の法則を述べ、自然に人心を敎化する處尠からざるべきを思ふ。元より、讀者の着眼點によるべけれ共、本書の素志亦實に玆に存す。乞ふ讀者、樣に依つて胡蘆を描くこと勿れ。

大正九年一月　　洛東泉山々莊

著者　　二酉洞學人識

目次

○花川戸助六（町）……一
奴の小萬……一八
幡隨院長兵衛（田）……二五
唐犬權兵衛（町）……三七
小金井小次郎……四五
夢の市郎兵衛……五〇
放駒四郎兵衛……五三
緋鯉の藤兵衛……五四
大前田英五郎（賭）……六二
釣鐘彌左衛門……六八
根津四郎右衛門……七四

夕立勘五郎……八〇
花屋金兵衛……八一
相模屋政五郎……八四
博國定忠次……九五
村雨金五郎……一〇二
木津の勘助……一〇九
金石板甚五郎……一二三
金看板甚九郎……一二六
日本銀次……一三八
新藏兄弟……一四三
柳屋お藤……一四六
野狐三次……一五六
業平善三……一六〇

江戸屋虎五郎……一六八
井筒屋小糸……一七二
小櫻仙太……一八四
般若坊强覺……一八七
木村五郎藏……一九七
馬方藤五郎……二〇〇
郡山半五郎……二〇三
堀越藤左衛門……二〇六
長業寺清兵衛……二一二
竹川森太郎……二一五
笹川繁藏……二一九
勢力富五郎……二二二
美濃吉之助……二二六

目次終

上州屋幸右衛門……二三五
甲州の茂吉……二四二
黒須大五郎……二四五
逸見の貞藏……二四九
會津の小鐵……二五六
飯岡助五郎……二五九
信夫の常吉……二六二
清水次郎長……二六四
新門辰五郎……二六八
銚子の五郎藏……二八六

花も實もある

俠客の戸籍調べ

醍醐惠端著

花川戸助六

俠客の戸籍調べの一の筆に乘つた果報者は、誰あらう、芝居に將又、小説に於て俠客界隨一の色男に仕立てられ、川柳子からは『江戸一番の頭痛持ち』などと皮肉くられて居る花川戸助六である。然し、彼は果して世俗に言ふ通りの色男、乃至紫の頭巾をして、蛇の目傘で廓を素見した親分であつたか如何か？聞人の眼目はそこでもあらふが、問題なるな、其邊の詮議は後廻しにして、先づ吾輩が最近冥土の戸籍役場から、態々取り寄せた戸籍謄本があるから、物の順序で、是から御見せ申しやしよう。

第一號　戸籍謄本

原籍地	日本國出羽國新庄藩。
轉籍地	日本國江戸表、淺草、花川戸町。
現住所	西方國極樂市俠客通六丁目六番地
職業	初め浪人、次に渡船の船頭に零落し、最後に俠客となる。
婆婆での職業	吉原三浦屋のお職華魁、助六に落籍されて女房となる。
婆婆での職業	出羽新庄、戸澤大和守の家臣
裝婆での職業	千住掃部宿に生れ、初め金物商、零落して爛酒賣となる。娘揚卷助六の妻となつて、爛酒賣を廢業して御隱居樣で納まり返る。

花川戸助六（前名 花澤助六郎）

妻　揚卷（本名 音羽）

父　花澤主水

妻の父　新兵衛

右謄本は婆婆冥土兩戸籍原本と照合相違する處なし、夢々疑ふこと勿れ。

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王印

男の中の男と呼ばれ、音に響いた大親分、その出生を索ぬれば、黄金花咲く奥州出羽は新庄、戸田大和守の家來であつた。主持つ人は、その日の風次第で浪人者となるが落ち、江戸に出て來た花澤助六郎、零落れて役に立つ藝があるでなし、一枚二枚の身の皮を脱いで、あとは脱ごうと思つても脱げぬ丸裸、木から落ちた猿よりも見慘めな有樣、遂に其日の糧にも困つたところから一時は小船乘りとまでなつた。武士は食はねど高揚子とも言へない。然し元來が興太式人物であつたなら沈香は費かず屁ばかり放つて屁つぴり虫の如き一生を終つたに相違ないが、江戸一番の俠客と謳はれ絶世の美人揚卷華魁に命までもと惚れられる男はどこかに違つた所がある。いくら困つてゐてもものの節々に才氣炳發、イルミネーションの如く、劍術柔

術何でもかでも、門位まではやれるところから、ふとして縁をうまくだとつて、米と金とのうなる、藏前の札差衆を踏臺にして、人足元締となつたが出世の基で、鰻上りに忽ち町奴の頭領となつた。山芋が鰻になつた以上である。

芝居で見ると紫縮緬の鉢巻をして、揚巻とジャラついたりデレついたりするが、冥土に居る助六親分に聞いて見たら、『飛んでもないこと、私や紫縮緬で鉢巻なんぞしたことはありやせんよ、川柳とかいふ、變な歌の化けものが、「助六は江戸一番の頭痛持ち」だなんて、よくも言へたもんでサアね、憚乍ら此助六を、呼捨にして、それで根もない嘘で、皮肉るなんざ、あまり、見つともよかありやせんや、ありやね、二代目團十郎とかいふ大歌舞伎役者が、厭に生白え得手勝手に、この助六を色男にして、おまけに紫縮緬の鉢巻なんぞ、まア尤躰ない眞似をしやがつたから江戸一番のデレ助野郎のやうに、後世に誤解されるやうになつたんです。先日、この冥土で合つた時にヤイ團くつ野郎、あんな下らねえ眞似を爲やがつて、一體乃公

の顔を何うして呉れると啖呵を切つてやつたら、奴さん、根が生白え役者だから、胴震ひして、平蜘蛛の樣になつて、謝まつてたので、惡いと氣が付きや、それでえいと、まア〳〵出來ねー勘辨してやりやした』と云つて居た。

助六が有名になつたのは、例の揚巻の一件である。助六は揚巻に戀して居たのではなかつたが、揚巻華魁の父、烟酒賣の新兵衛から、鼻のつまるやうな話を聞いたのが基で、あゝ氣の毒なものじやと思ひ、その揚巻を落籍し、父親と一緒に堅氣に暮さしてやらうと、玆元商賣ものの俠氣を出したのが抑もの發端で、助六揚巻と謠はるゝやうになつたのである。

さて、助六は戀の何のといふ譯でなく、唯一片の俠氣で、落籍しやうとした處が當時江戸浪人團體で稻妻組の世話役として巾を利かして居た鳥居新左衛門と云ふ鼻下長武士が、揚巻に現を抜かし、遮二無二落籍して手活の花と眺めようといふお目出度さ。場巻の判人が、松鶴屋紋兵衛といふのが天下無双の强欲爺で、揚巻の父親

新兵衛が揚巻の身代金を持つての歸途、掏摸に盜られた時、五兩貸してやつた其證文に、十の字を書込んで五十兩貸したと稱し、揚巻が年期を終り借金も皆濟して居るにも拘はらず、新兵衛に引渡さぬ。而して揚巻に鼻の下を延ばして居る鳥居新左衛門からウンと絞り上げやうと云ふ、血と涙との缺乏して、慾の皮斗りのつッぱつた遣り方。助六は紋兵衛が煮ても燒いても、酢でも蒟蒻でも食へない强慾者だとは知つて居るが、流石は顏を賣る人氣商賣の親分として、成るべくは物穏かに話をつけて、揚巻を親元に歸して遣らうと承應元年一月十六日の朝、雪もつらつく、嵐の寒いのに松鶴屋紋兵衛を訪ねて、新兵衛に貸したと云ふ五十兩を助六から支拂つた。いくら理を非に曲げて、丸い世間を角に渡る紋兵衛でも、今は文句の付けようがないから、揚巻を助六に落籍さすことに話を纏めた。然し、狸と狐と河童との惡いところを一所にしたやうな紋兵衛は、其日の中に神田紺屋町なる鳥居新左衛門を訪ね助六が既に金まで拂つて引渡すとの契約をし乍ら、その顏さげて、知らぬそのまゝ

鳥居に揚巻を引渡すことに甘く持かけたから、鳥居はその事情は知り乍らも早速百兩の金を出した。金さへ捲き上げたら、もう用はないと、尻に帆かけて歸りゆく。

この事がすぐ助六の耳に這入る。助六も江戸隨一の俠客、花川戸の親分といふ名聲に對しても揚巻を鳥居如き素浪人に取られては男が立たぬ。男の立つ立ぬより、折角可愛想と思つた、揚巻の身の上を心配して、一應鳥居に掛合つて見ると、劍もホロ、の挨拶。其上口で足らぬと刀にかけて打果そうと、門弟等の烏合の勢を頼むで、助六を取圍んで見たが、助六も元は武士、遂に門弟諸共打据られた恥晒し、刀掛けの、三ピンのと罵られて口惜がつてゐる間に、助六の子分が揚巻を奪ひとつた惡い量見でする奴は、九分九厘迄は成功のやうでも、こうした所で失敗るもの、前の處を芝居で演ると、揚巻が醉つて鳥居に喉呵を切つて大向ふからヤンヤといはるゝのだ。

「慮外ながら揚巻でござんす、男を立てる助六が深間、鬼の女房に鬼神とやら、今

からが揚巻の惡態の始め、お前と助六さんと比べて見た所が、こちらは立派な男振こちらは意地の惡さうな男付、たとへて言はゞ雪と墨、硯の海も鴨戸の海も海と云ふ字は一つでも深いと淺いは客と間夫、間夫が無ければ女郎は暗がり』と氣焰萬丈當るべからず、『鳥居の酒面をコキ下し、振つて〳〵振り飛ばす處痛快淋漓、江戸兒を喝采させること妙。然し實際は揚巻は其んな事は言はなかつたと二三日前吾等の所へ揚巻から手紙で否認して來た。

さて、斯うなると因果の車は、自ら神の手で廻されて、紋兵衛が、首の座に直る番である。助六は彼の段々重る不埒を憤つて、嚴重な抗議を持込むと、紋兵衛も、甲の皮の堅い惡黨本性を現はし、鳥居から受取つた百兩は返せぬ、お前さんから返金して呉れ、其れが厭といふなら斬るなり刻むなり食うなり拷るなり勝手し爲やがれ、と尻をまくつて惡態三昧、流石の助六も腹を据え兼ね、紋兵衛の雁首を叩き落さうと立上る。その途端、仲裁が這入つて、先づ〳〵と一先づ助六はならぬ勘忍し

乍ら歸つた。然し、紋兵衛は、一應懐に入れた金を出すやうな、生やさしい者じやない、どうあつても鳥居に百兩返さぬと言ひ張る。揚巻の父親新兵衛は、助六親分が紋兵衛を叩き斬つて、御上の處分を受けるやうなことになつては一大事と、一人で氣を揉み乍ら例の如くおでんの屋賣を出して居ると、傳次と云ふ巾着切りの親分が通り掛り、おでんを食つて居る所へ、役人が通り合せたが、前科數十犯の曲者であるから有無を言はさず自身番へ拘引した。此時傳次は素早く役人の目をぬすみ、懐中の百三十兩入の胴巻を引出し、側にあつた箱の中に入れて置いた。新兵衛は店を仕舞はんとして之れを發見したが、元來正直者であるから直ちに自身番に届け出ようと思つた。然し、そこが小者の悲しさ、現在吾子揚巻に關する百兩問題で頭を惱まして居た矢先であつたので、惡いとは知りつゝ一時無斷で流用することにした。之れが後日助六に迄累を及ぼす原因とならうとは、神でなく佛でない新兵衛爺さん知る由もない、そこで新兵衛爺さん其中の百兩を親戚から融通して貰つたと云つ

て助六に渡さうとした。助六はオツチヨコチヨイでない、百兩と云へば今日の千圓、おでんの屋臺店稼業の新兵衛爺さんにしては拵にない、再三不正なものではあるまいなと念を押したが、新兵衛爺さん何處までも不正でない正當な方法によつて融通して貰つたものだと主張する。其翌朝助六新兵衛同道で松鶴屋へ行き、新兵衛の手から紋兵衛に百兩を渡し、新兵衛が借りたといふ五十兩は助六から支拂ふ約束にして揚卷の證文は素より新兵衛が入れた借用證書まで受取つて歸つた。

處が鳥居新左衛門の方では、助六に揚卷を横領されたのを口惜しがり、浪人組に廻狀を廻し、百數十人を召集し助六襲撃の戰闘準備を整へた。助六の方でも斯うなつては後へは退けぬ、之れも數百人の乾兒を召集して對抗準備を整へた。此處で誰か仲裁に飛出さなければ血の雨降らす大騒擾が勃發する形勢となつたが、稻妻組の頭取、寺西彌惣左衛門寒心が仲裁に這入り、慘事を未前に防止した。此寺西は芝居で演ると寺西寒心として水野十郎左衛門を頭取とする白鞘組の一人に引張り出され惡

黨にして仕舞つてあるが、實際は其麼惡黨ではない、浪人こそして居れ、公明正大變節改論などは決してやらぬ。寺西は鳥居に一喝を食はして縮み上らせ、卑怯の振舞武士の面汚し今後氣をつけろと警告を與へた。然し集つた浪人連承知しない、寺西から事の眞相を聞いて承知し、とう〳〵鳥居に謝罪させた。

斯くて暗憺たる戰雲去り問題は平和的に解決し、問題の中心揚卷花魁は助六に落籍された形式によつて、俠客金神長五郎に預けられたが、揚卷の別嬪キユーピットに惡戯されたものと見えて助六に戀して仕舞つた。男振りなら精神なら手腕なら何一つ申分のない助六さん、女と生れた冥加には、こんな殿御と添伏しの、出來る事なら私あ生命も要りんせぬと、素晴しい戀り方。但し助六さん妾貴君に戀してよなど〻不躾な事は言はなかつた。由來戀病ひと云ふやつはお醫者樣でも草津の湯でも治らない、好いた人と夫婦にしてやるのが一番妙藥と昔から相場の定つたもの。預つた金神長五郎夫れと察して粹を利かし出雲の神樣には無斷で代理となり、助六親

分に揚巻の熱烈な戀を配達してやつた。助六とても男を賣るが商賣なれど、素より木でなし竹でなし、別嬪に惚れられて、他人に頭を叩かれたやうな惡い氣持はしない。何故惚れたかと文句を並べる程、野暮でもない。況んや吉原六千の美姫が束になつても及ばないと云ふ、天下の美人、揚巻さんにお前とならば何處までもとゾッコン戀されるに於、をやである。遂に揚巻は戀の勝利者となつて目出度助六さんの宿の妻となり、淺草は花川戸、助六の家に納まり、長火鉢を中に差向ひ、嬉しさうな顏つたらない。イヤハヤ斯うなつては氣の惡くなるもの豈獨り乾兒のみならんやで、吾輩も之れ以上書けば變な氣になり家に凝として居られなくなるから、其先は平に御容赦を願ひ讀者諸君の賢明なる想像に一任する。

處が茲に重大問題が突發した。夫れは新兵衛が無斷で流用した百三十兩問題で、實は其金は傳次が質屋に忍び込んで盗んで來た泥棒物であつた爲めに、新兵衛は泥棒の金を流用した罪科によつて江戸を放逐されたのみならず、助六は傳次殺しの嫌

疑を受けて監獄に拋り込まれた。助六が傳次殺しの嫌疑を受けたといふのは、傳次が同心に捕まり自身番所で訊問されたが前科數十犯の曲者であるから餘罪ある見込みで檢事局へ送られる途中捕繩を切つて逃走し、新兵衛のおでん屋臺で尋ねたが、新兵衛は其時既におでん屋を廢業し、助六の家に引取られて御隱居樣に成り濟して居た。傳次は新兵衛が賣拂つた掛行燈を手掛りとして花川戸の助六の家に居る事を突止め、箱の中に入れて置いた百三十圓取り戻しにやつて來た。新兵衛頗る頓首して居るのを揚巻が聞いて、歸つて來た助六に話したので、助六が支拂ふことにし日を約して傳次を歸したが、傳次は約束の日に來ない。其れから十餘日經過ても依然として影も姿も見せない。助六不審に思つて居ると、實は傳次鳥居新左衛門の賭場で博奕を打ち、三百兩儲け夜更けて馬道の隱家へ歸る途中、尾けて來た鳥居の門人の爲めに下谷の三味線堀で殺されて仕舞つた。傳次の盗んだ百三十圓を流用したのが新兵衛で、新兵衛は助六の顏を潰すまい爲めに流用したものであることは新兵衛が

訊問された時に陳述して居るので、これは適切助六が其金を返さない爲め傳次を殺したものに相違ないと嫌疑がかゝつたのである。前後の模樣から助六が傳次殺しの嫌疑を受けたのは無理もない。

然し結局揚卷の努力によつて傳次を殺した眞犯人は鳥居新左衛門の門弟花垣五郎藏お囮の才二兩人であることが分り、助六は無罪放免となり、鳥居新左衛門及花垣五郎藏お囮の才三は斬首の刑に處せられ、松鶴屋紋兵衛も舊惡露顯し、同樣斬首の刑に處せられ、惡因惡果善因善果一切の問題は、目出度く大團圓を告げた。

揚卷事件以來助六の名聲は全都を壓し、江戸一番の大俠客として謳はれた。隨つて其義俠的功績は大小數ふるに遑なしである。揚卷の貞節は町奉行牧野大隅守の認むる所となり、五貫文を與へて表彰した。思ふ男には添ひ、お上からは金を貰つて表彰される、まア何て間がいゝんでせう。新兵衛は江戸を放逐されたが千住に隱宅を構へ、助六の扶養によつて安全氣樂の一生を送つた。助六は五十二歲で歿し揚卷は

三十四歲で死んだ。

芝居では助六が髭の意休と揚卷の事について喧嘩をするやうに出來て居るが、これは鳥居新左衛門との喧嘩を仕組んだものでなくて助六の贔負で恩人の板倉屋治兵衛が新町（今の本所龜岡町）の毬多の親分圓左衛門の爲めに恥辱を受けたのを助六が雪いでやつた事件と鳥居新左衛門との事件を突混ぜて仕組んだものである。

今日小說や講談に傳へられて居る助六傳は法螺を喇叭から吹き出したやうなもので、好加減に拵へたものが多いのであるから、充分眉に唾をつけてかゝらないと濫まゝれて仕舞ふ。

死後は生前の功により極樂行を許され、前記の處へ一戸を構へ夫婦水入らずで面白可笑く暮し、助六は冥土男伊達株式會社の專務取締役となり、毎日出勤し熱心に事務を執つて居るといふことである。

淺草今戸町の易行院と云ふ寺に助六と揚卷の遺骸を葬つたと云ふ墓がある。これ

は承應二年二月十一日助六と揚巻が心中した遺骸を葬つたのだと言ひ傳へられて居る。然しこれは助六の墓でもなければ揚巻の墓でもない、好い加減の拵へものである。吾輩が冥土に居る助六と揚巻に手紙をやつて問合せた返事にはあれは誰かの惡戯で私等二人の墓などと本氣に信ぜられては迷惑千萬だとあつた。

斯う云ふ念の入つた惡戯のある以外にもつと振つた說がある。それは助六揚巻心中の本家本元は江戸でなくて京都の島原だといふのがそれであるが、更に猶一層振つた珍々妙々の異說がある。其異說によると助六は本名を都鳥重昌と云ひ、元和年中京都に住で居たが、人爲仁俠にして島原の名妓總角と情意投合して百度以上の大熱に、數多の遊治郎をして垂涎三千丈たらしめた。時に德川家康の子忠輝の家來眞柄要人なるもの秀忠を害して忠輝を將軍たらしめんと謀み、忠輝の命なりと詐り、部下の浪人と結んだ、助六の友人源八も亦要人に與した。助六之れを知つて源八を諫め自首させた、爲めに要人は深く助六に怨を含み遂に助六を暗殺した、助六の戀

人總角は助六の死を悲しみ、何とかして戀人の敵を取りたいと苦心し、一夜僞つて要人を客とし、之れを刺殺して戀人の仇を報ひ、後ち丈なす黑髮を惜氣もなく剃り落し、クリ〳〵の坊主頭となつて尼となり、戀人助六の靈を弔らつたといふのである。

牽强附會も此に至れば極まれりで、よくもこんな馬鹿げた飛んでもない牽强附會說を憶面もなく拵へられたものである。助六に問合せた時此事も序でに書いてやつた處が、『御來示の件、一笑に附し去る程の價値も無之候、私共は心中も仇討も仕らず世の人々のものの好にも驚き入たる事に候』といふ返事。こんな飛でもない愚說に迷はされて本當だと信じたら、冥土へ行つて助六夫婦に出會した時に拳骨の一つ位見舞はれるから、老婆心から一寸注意して置く。

奴の小萬

第二號　戸籍謄本

原籍地　大阪久寶寺町三丁目八十八番地

現住所　日本の極樂市美人横丁二八の二九

大阪問屋橋南詰吳服商平野辰治兵衛の十三女、生れ立てのホヤ〳〵の時養女として入籍　奴の小萬

亭主　娑婆での職業力士大關　濡髮長五郎（兼岩）

養父　娑婆での商賣は吳服商　菱屋清兵衛

養母　お石

右謄本は戸籍の原本と相違なきことを認證す

無限元年十三月四十九日

地獄極樂の戸籍吏　ヤミー女史㊞

女だてらに俠客なんて怪しからんと、野暮を云ふべからず、岩戸神樂の昔より女

ならでは夜の明けぬ日本である。女俠客が一人や半分あつたとて、現内閣が總辭職をしなければならぬやうなことはあるまいし、不思議でも何でもなく、寧ろない方が不思議であるまい歟。

遠からん者は蓄音機にて聞け、近くば寄つて顯微鏡で目にも見よ、と云はなくても、享保年間女俠客として、よしあし繁る浪華に謳はれた姐はんは、奴の小萬に止めをさす。

表面、小萬姐はんは、大阪市南區久寶寺町三丁目菱屋清兵衛の一人娘となつて居るが、實は、菱屋の養女で、生の親は、同じ大阪は問屋橋南詰吳服商平野屋治兵衛であることは、戸籍謄本に記載されてある通りである。

菱屋清兵衛は、女房の名がお石といふ爲でもあるまいが、子供がない、石女であつた。專心一意、黽勉努力、畢生の大活躍で夜に日を次いで、嘘と元値とで、金は蓄める。家作造作は殖えるといふのも、子がなければ畢竟骨折り損の草臥儲けで、面

白くない月日を送つた。子のない人程悲しきはなく、山上憶良といふ古の歌人は、『白金も黄金も玉も何かせん、子にしかめやも』といつた通り、清兵衛お石の落膽如何斗り、目から涙がボロ〳〵と流行節でないが、神に念じ佛に祈つても駄目、授りものゝ子は遂に出來ないと、その頃の産科の先生の診斷、假令粗製濫造の片破子でもよいと思ふに任せぬ人の世の常、ところが茲に又是と反對に、呉服屋治兵衛の方では、滅法な子福長者で、年々歳々少くとも一人づゝは生れる。今年も又腹ボテで、治兵衛夫婦は五月蠅がつてゐる處へ、清兵衛は治兵衛と知合のところから、遂に相續して、現在女房の腹に、止まり在して居る子供を貰ひたい、遣りませうと豫約した。治兵衛さんの方では既に豫約濟みであるから雄であらうと雌であらうと構はないと思つて居たが、清兵衛どんの方では男であれかしと祈つて居た愈々オギヤーと生れて見ると男と反對のもの、オヤ〳〵と思つても仕方がない、豫約通り生れ立てのホヤ〳〵といふ處を貰ひ受けた。扨て女兒でも我子となつて見れ

ば可愛さは又格別、名も小萬とつけ、乳母を雇入れ、蝶よ花よと愛み育てた。其可愛がり方と云つたら目も鼻もない。但し目も鼻もないと云つても何も清兵衛どん夫婦の目や鼻が無くなつてノツペラボーになつた譯ではない。其點は誤解のないやうに斷つて置く。

十二三の頃から裁縫類は素より琴三味線茶の湯活花、女一通りの金に糸目をつけず教へ込んだ。處が小萬が丁度十五の時大事の大事の箱入娘に虫がついた。といふのは一夜隣家に泥棒が忍入り在金を盗んだ上女房を辱めた。小萬嬢さん此話を聞いて町家の女でも護身用として武藝の一ト通りは心得て居る必要があると大いに感じて乳母に相談すると、此乳母君乳母奉公こそして居れ並製の女でない、素性を洗へば肥後熊本の城主細川越中守の家來松本東馬といふ歴とした武士の家に生れた歴とした特別上製品で柔道が得意剣術も相當に心得て居るのであるから、宛で泥棒屋に泥棒の相談をするやうなもの、速座に横手を打つて賛成し、では未熟乍ら私が

秘密にお教しませうと、養父母家人の目を掠めては姫御前のあられもない、ドタンバタンの稽古を始めた。大事の〳〵箱入娘にこんな飛んだ虫がついたのを知らなかつた養父母は好い親馬鹿ちやんりんの標本である。

處が小萬が十八の時父に連れられ天滿の祭禮に參詣し、通りかゝつた倶利加羅の吉五郎といふ博奕打の親分が小萬の父に突當つて難題を吹かけ、アワヤ倶利加羅の拳骨が淸兵衛どんの禿頭の頂邊に天降らうといふ刹那、小萬が飛出して吉五郎を向側の漆屋の漆桶の中へ投げ込んだ。これが遺恨になつて其翌年新町の廓内で小萬は吉五郎の率ゆる三十餘人の破落漢に包圍され、大喧嘩となつた。小萬は乳母に柔道を敎はり劍術は一刀流の先生中村庄兵衛について修めたのであるから、腕は冴えて居る。又もや吉五郎始め子分等が散々酷い目に會はされた。此時當時浪華隨一の俠客根津四郎右衛門が仲裁に入り、小萬を養家に送り届けたが、養父母は小娘の癖に博奕打を對手に喧嘩をするやうでは祿な者にはなるまい。其末恐ろしい女は桑原〳〵と雷樣扱ひにし、實父母に御返却仕らうとしたが治兵衛さんの方でも一旦呉れたものであり且そんな恐ろしい女を背負込んでは堪らないと御免を蒙ると云ふ始末、小萬は寧ろ俠客となつて世を送らうと決心し、自ら進んで勘當して貰ひ、四郎右衛門の子分となり、更に四郎右衛門から鋭心明智流の劍道、澁川流の柔術を敎はり、弱きを扶け强きを挫き、義に勇んで俠に終始する天晴の女俠客となり、派手な服裝に髪を奴に結ひ、男帶を甲斐口に締め、銀造りの長脇差を落しに差し、懷手をしてプラリ〳〵と大道を歩く姿は天上一品、扮裝がこれで絶世の美人と來て居るから、有象無象どもには辨天樣と毘沙門樣とを半々に綯り交ぜたやうに見える。其美しい奴姿が忽ち評判となつた。奴の小萬といふ名はそれからつけられたものである。

然し如何に挫强扶弱を本領とし正義人道主義を實行するを以て商賣とする小萬姐さんでも、キューピットが放つ銀の矢には敵はなかつたと見えて、あの人の爲めなら

ば妾生命もいらないわと首つ丈け惚れ込んだ男が出來た。それは當時美男で强くて一二年のうちには、横綱になるだらうと浪華角界の人氣を一身に集中して居た西の大關荒石長五郎事濡髮長五郎、時に小萬が十九で濡髮が二十六。長五郎にしても小萬に惚れられては餘り惡い氣持はしない。イヤハヤ到底無事に納まりつこはない。

天下の掌摺辻曰く、ヨイショ御兩人妬けます〳〵。

打ては響く叩けば鳴る、思ひ中にあれば色外に現はるで、小萬姐さんが荒石關に足駄はいて首つたけといふ評判が誰の口からともなく噂されるようになつた。親分囲郎右衛門は粹を利かし二人を夫婦にしてしまつた。小萬と長五郎の結婚が發表されたとき、失望したものは束にする程あつたといふ。然し其頃迄は嚴頭の感を書いて華厳の瀧壺に飛込んだ先達がなかつたので小萬に失戀したものも華厳行をやつて役人の御厄介を煩はしたものは一人もなかつたさうである。

其後小萬の俠名は益々高くなつたが、今では戸籍謄本記載の現住所に夫婦水入らすのちんかもで面白可笑暮して居るさうである。

幡隨院長兵衛

第六號　戸籍抄本

原籍地　江戸淺草裏花川戸幡隨院門前助六長屋
現住所　東京市淺草區北清島町源空寺墓地
娑婆での職業　諸家人入元締兼俠客　幡隨院長兵衛
現職　冥土俠客會々長　坊名伊太郎

右抄本は娑婆淨土兩戸籍の原本と一分一厘も相違する處なし娑婆の善男子善女人夢々疑ふ事勿れ。

無限元年一月元旦

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王 印

明暦の頃、幡隨院長兵衛と云へば、俠客の權化、古今隨一の大俠客であつたことは、今更お浚ひする迄もあるまい。芝居に小說に謠はれて居る。長兵衛は幼名伊太郎と云つて浪人者の伜、父は何藩の浪人であつたか分らないが、兎の角槍一筋の胤で、腹からの素町人でなかつたことは確かである。

江戸と云へば天下の支配人德川將軍の鎭座在す中央集權地で、而も天下の直參だと竹の皮に小便の旗本十萬騎が我物顏に肩で風を切つて歩いた所謂お膝元であり、大名小名から陪臣浪人どもがウヨ〳〵集つて居た日本隨一の武士の集合地で、善く云へば武士道の精華を集めた處、惡く云へば殺人器を携帶した人殺し野郎の掃き溜塵埃棄場である。其危險地帶を長脇差に懷中手、幡隨院長兵衛は男でございと扶弱挫强の旗幟を飜して濶歩した心膽と實力とに至つては旗本八萬騎が束になつてかゝつても到底足許にも及ぶ處でなかつた。されば大江戸幾十萬の市民は、將軍よりも旗本よりも諸大名よりも只だ一人の大俠客幡隨院長兵衛を有するを以て名譽とし誇

りとしてゐたのである。

當時『向ふ通るは長兵衛じやないか、鐵砲擔いで小脇差を差して、何處へ通ると問ふたれば、雉子のお山へ雉子打に、雉子はケン〳〵ほろゝつて、お茶まゐれ、新茶をまゐれ、お茶も新茶も飲みともないが、こゝな小娘によよと惚れた、おせんや〳〵、おせん女郎、そなたの差した笄を、拾ふたかもろたか美しや、市右衛門どんの一むすこ、女房が泣いて惱氣する、女房は亀屋のお鈴どの、おつるが處から文が來た、文の上書よんでみる、一に香箱、二に葛籠、三にさらしの帷子を、誰に着しようと買ふて來た、おまんに着しようとて買ふて來た、おまん死なれてけふ七日、あすは待夜の牡丹餅よ』と云ふ小唄が流行したが、これは長兵衛の遊獵姿を謠歌したものであることは今更吾輩が蛇足を加ふる迄もないが、以て如何に長兵衛が江戸全市民に敬愛され崇拜されて居たかが分らう。

「長兵衛は男でムい」と云つて大道を濶歩したが弱い町人を脅しつけて「何うだ、豪い

だらう」と云ふ程詰らないオッチョコチョイではなかつた。無暗に喧嘩を吹掛けて己れの豪さ加減を廣告するような淺薄な瓢六玉ではなかつた。弱い者虐めをして强い者にはヘイコラするやうな意氣地無ではなかつた。誤てば乞食立ん坊にも膝を屈して謝罪するに躊躇せなかつた、其代り無法非道な奴であつたら、大名旗本でも蹂躙つて揉みくちやにして首筋を摘み上げ、一昨日お來とポーンと拋り出すか、然もなければ蹈潰すか擲り殺すか首と胴との泣別れをさせるかしなければ承知しない。而も其相手が何者であらうと容赦はない、正義を攪亂し人道に楯着く輩と見れば片つ端から取り挫ぐのである。此の意氣と此の俠氣とによつて、江戸の市民からは生神樣のやうに奉られたのも無理はない。

長兵衛の事跡は殆んど捕捉し得られぬ迄に敏逸して仕舞つたが、水野十郎左衛門との格執は事實であつたらしい。其原因については諸說區々として一定して居ないが、水野は三千五百石の旗本であつたにも拘はらず不良旗本で、十數人の不良旗本

を糾合して自分巨魁となり、武士俠客白柄組或は神祇組と稱して江戸市中を横行し脅迫、强盜、喧嘩、强姦、無錢遊興をやらかし、到る處で到らざるなき亂暴狼藉を働き、市民から蛇蝎の如く嫌はれ、白柄組と云へばあの無法組かと鼻摘みにされて居た。長兵衛は水野を巨魁とする白柄組が天下の直參を笠に被り、農工商の上に立つ自分であり乍ら、亂暴狼藉を働いて良民を苦るしめるとは怪しからん、斯う云ふ奴等は、ウンと酷い目に會はせ、鼻つ柱を挫いて置かないと、將軍家の御威光に泥を塗るのみか、天下擾亂の禍因となるものだ、高が旗本の十人や二十人がと看過しては居られぬ、實に由々しい社會問題だと思つて居た。水野黨の方では亦江戸全市を壓する長兵衛の聲望威力を嫉視し、機會だにあらば喧嘩を吹掛け、長兵衛を無き者にして町奴の勢力を掃蕩し、白柄組を天下無敵のものたらしめようと云ふ心があつて、表面は兎に角、內心は双方敵視して居つた。これが長兵衛對水野の格執の原因であるが、兩者間に火蓋の切られたのは、長兵衛の乾分唐犬權兵衛と、夢の市郎兵

衛の兩人が木挽町の芝居小屋で長兵衛の子分の一人を酷い目に會はせた水野の家來金時金兵衛と渡邊綱右衛門の二人を小つ酷い目に會はせた事件である。この事件は唐犬權兵衛の部に述べて置いたから茲には重複して述べないが、其時十郎左衛門は白柄組一同を引連れ默つて歸り、手紙で長兵衛を裏三番町の屋敷へ呼び寄せた、其手紙には遺恨がましい事は少しも書いてなかつた。只だお互ひに睨み合つて喧嘩をするのは詰らぬ事であるから仲直りをしよう、屋敷で膝を交へて一盞酌み交したいから是非來て呉れろとあつた。長兵衛は其手紙を見て文句通りに解釋するやうな間抜ではなかつた、ハヽア是れは乃公を巧みに呼び寄せて置いて欺き殺すつもりだナと早くも裏面の魂膽を覺つた。

長兵衛は縱令膽のやうに寸斷々々に切刻まるゝ共、往かなければ男の顏が潰れると堅い決心を以て子分が止めるのも諾かず、單身水野の屋敷へ行つた。水野は式士の風上にも置けぬ卑怯な奴で、尋常に立會つては到底長兵衛に敵はないと思つたの

で、和睦を名として長兵衛に酒を飲ませ、長兵衛が好加減醉つた頃に幸ひ風呂が沸いて居る醉覺しに一風呂浴びたら如何と勸めた。長兵衛素より然う來るだらうと覺悟して居たので、ハヽアこりやア乃公を風呂に入れて置いて殺さうといふ計畫だナと早くも其れと覺つた。然し此處で辭退すれば卑怯と思はれる虞れがある、殺されると知りつゝ長兵衛は風呂へ這入つた。大抵の者なら風呂に這入ると見せかけて逃走するのだが、長兵衛は其麼度胸のない生命惜みではなかつた、彼れは悠々と風呂に浸り、淘然として爛々たる槍の穗先が幾本か板一枚外に仄めいて居るのも知らず顏であつた、水野は頃を計つて部下と共に槍を提げて庭傳ひに湯殿の後ろへ廻り、湯殿の入口廊下には二三人を伏せ、廊下へ出て來たら一突きに突殺す算段、其他は湯殿を三方から圍み、皆一齊に槍を突込んだ。湯棺は生前濟しておいたとおちつき拂ひ、水野の槍先で、俠と勇と智と熱との籠た、その太い胴腹を突きぬかれ往生した。

長兵衛が殺される時の狀況については種々說がある。一說には水野は列座の味方

と共に矢鱈に長兵衛に盃を獻し、後には七合入の大盃を持ち出して献酬を初め、先づ長兵衛に献じ、長兵衛が水野に返盃した、水野は滿々と酌いだ大盃を飲む風に見せて突如長兵衛の顔を目蒐けて投げつけた。長兵衛パッと體を轉す途端に水野が抜打に切りつけ、長兵衛の頭を梨割りにして仕舞つたといひ、他の一説には水野一人でなく居並ぶ七八人の者が一齊に切つけたので、流石の長兵衛も身を轉はす暇なく斬り殺されたと云ひ、又他の一説には突かれたのは風呂場であるが、長兵衛は横腹を突かれながらも湯殿の柱を引抜き、其れを獲物にして戰つたが重傷を負ふて居たので遂に殺されて仕舞つたと云ひ。現在青山一丁目に住んで居る水野の後裔水野鉾十郎氏の語る處では、十郎左衛門と長兵衛とは何の遺恨もなかつたが、十郎左衛門は大久保彦左衛門と別懇で常に往來をして居た。或は彦左衛門が水野を訪問して四方八方の世間話の末、長兵衛は面白い男だといふから一つ招んで見ようと相談し、使をやつて長兵衛を招いた、長兵衛は突然招ぶとは變だと思つて妻子乾分と水盃を

して出かけた。乾分の主だつた者は危險だから供をして行きたいと云つたが、其んな卑怯な眞似はしたくないと云つて、單獨で水野の屋敷へ行つた。水野は叮嚀に待遇し、酒を酌交しながら脇差を拔いてポンと大鯛の頭を切り、及先に貫いて「長兵衛肴を致せ」と突出した、長兵衛添けないと懐紙で受けやうとすると、遠慮に及ばぬと云つた、長兵衛然らばと口を開いて及先の肴を啣へ、悠々として其肴を懐紙へ取り換へて一禮した、水野も彦左衛門も其剛膽に感心し、以來交際しようと其日は別れ、其後水野と長兵兵は互ひに往來して居た。處が長衛兵は何うも水野に對して打解けた所がない。或夏のこと長兵衛が水野の屋敷へ來た、先づ暑いから一風呂入つたら宜からうと云はれ、頂戴致しますと湯殿へ這入つたが、其時長兵衛は窃と脇差を持つて湯殿へ這入つた。之れを見た水野の若黨の軍平權平兩人が、湯殿にまで腰の物を持込むやうでは、何んな考へを持つて居るか知れぬ、長い間には主人を害するやうなことが起るかも知れない、こりや寧ろ今の中に殺して置いた方が安全だと、兩人

共謀して湯殿へ斬込み長兵衛を殺して仕舞つた。水野は其れを聞いて、先祖傳來の關の大兼光、二尺に餘る大身の槍、有名な蜈蚣槍と云ふ業物を提げ、庭の方から湯殿の後ろへ廻り、板圍越しに浴槽諸共突貫いた、水野は座敷へ歸つて殘念な事をしたと云ひ軍平權平に對しては無用の忠義立をすると云つて叱つた。軍平權平は切腹して死んだ。長兵衛の死骸は酒菰に包んで取捨てた。爾來水野家では一切酒菰を門内に入ぬことになつて、今日までも沪菰は水野家の禁物になつて居ると云ふのであるが、これは水野家に都合のよいやうに拵けた嘘つぱちで辻褄が合つて居ない。斯く水野家で自家に都合よく拵へた事實に徵しても、當時水野の長兵衛に對する卑劣さ加減が想像される。水野綽十郎氏は、そこに氣がついて居るか居ないか知ぬが、右のやうな自家辯護說を眞らしく語るのは、水野家に對する世間の同情を益々稀薄ならしむるもので、最其の引倒し、自家辯護が自家破壞となる。戸籍吏大いに御注意申し上げる。

又他の一說には色若衆の事から兩者間に格執反同を生じ、長兵衛を誘ひ、風呂場で慘殺したとある。これも確かな說とは云へない、殊に此色若衆云々の說は信ずるに足らぬ。又談などにある事跡も多くは好加減に拵へたものである。長兵衛が水野の屋敷で欺き殺されて約一年、長兵衛の子分唐犬權兵衛、夢の市郎兵衛、出尻清兵衛、小佛小兵衛などの腕利さが水野の屋敷へ斬込んだが、不幸にして衆寡敵せず一同捕縛され牢へ入れられた。其處へ耕鯉の藤兵衛が現はれ、將軍の面前で腹を切り、水野を鬼頭臺に上せ其一派の旗本を嚴罰に處し、虎の威を借る旗本の横暴を誡めざれば旗本對町奴の爭鬪は永久に根絶すること無しと主張した。將軍家初めて旗本の横暴を知り大英斷を以て水野に切腹を申つけ、其一派の白柄組の面々は半知乃至闕所とし、唐犬權兵衛以下入牢中の者は遠島の刑に處し、比較的公平なる裁斷を下した。

長兵衛君、水野の屋敷で殺されて冥土へ行くと、閻魔大王は『來たか長さん待つ

てたホイ、お前一人が可愛いホイ』と大いに歡迎し、生前の功によつて極樂行一等切符を交附した。今では冥土俠客會々長となり、名聲嘖々關界のオーソリチーとなつて居る。之れに反して水野十郎左衛門を始め白柄組の奴等は八萬地獄に落ちて晝夜四苦八苦どころでなく千苦萬苦の永久的苦役に服して居るさうである。

長兵衛生前の事跡につき婆婆の記錄では眞僞が分らない、これは長兵衛君から直接聞いたが一番確かであると思ひ、吾輩は特別至急電報で問合せた處が殘念な事には長兵衛君は西洋の地獄極樂視察に出かけた跡で間に合はなかつた。又一方閻魔大王へも問合せたが、大火で書類の大部分を燒いて仕舞つた、長兵衛生前に於ける事跡に關する記錄書も其中にあつて、再製しなければならぬが、目下長兵衛不在につき貴意に滿足を與へることが出來ないと返事が來た。故に遺憾ながら長兵衛の事跡については婆婆に殘つて居る記錄に據つて調書を作製した、何れ長兵衛君が歸り次第改めて報告することにしよう。

序でに斷つて置くが幡隨院といふのは長兵衛の姓ではない、幡隨院といふお寺の門前に住んで居た所から、人呼んで幡隨院長兵衛と云つたのである。長兵衛は純然たる町人であるから姓はない、只だ長兵衛である。

モ一つ斷つて置くが、長兵衛は賭奕はやらなかつた、諸大名旗本へ人入れの元締で賭博などやらなくとも堂々たる生活が出來たのである。

墓は淺草區北清島町の源空寺に在る。

唐犬權兵衛

日本一の大俠客幡隨院長兵衛の乾兒中の首席で長兵衛四天王の一人と謂はれた剛の者、鬪犬用の犢の如き土佐犬を一拳の下に張殺した腕力家、拳骨は宛然大鐵槌の如く、一振り振れば唸りを生じ旋風を起し、觸るれば骨灰微塵となるといふから其腕力の强さの程が知られる。唐犬の綽名は鬪犬を張殺した處から來たもので、實は

闘犬權兵衛と云ふべきであるが、何うしたものか普通唐犬と書く。一説に張殺したのは唐犬(洋犬)の大なるものであつたといふが、其れは本末を顚倒した牽張附會説で採るに足らぬ。矢張り闘犬を唐犬と文字違ひしたのを其儘云ひ傳へ書き傳へたと云ふのが事實である。冥土に居る權兵衛に聞合せたら張殺したのは唐犬ではなくて闘犬用の土佐犬の大いものであつたと云つて來た。本人が證明して居るのであるから是れ程確かなことはあるまい。

第七號　戸籍抄本

原籍地　江戸淺草の花川戸助六長屋長兵衛方

現住所　日本の極樂俠客通り五丁目五番地

娑婆での職業　俠客(幡隨院長兵衛一の乾兒)　唐犬權兵衛

右抄本は娑婆及淨土の戸籍原本と相違なきこと確實にして宛も亭主は男にして嬶は女なることの確實なるが如し、てなこと有仰ましたかネ。

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王㊞

冥土デモクラシー株式會社
專務取締役兼冥土俠客會長　幡隨院長兵衛㊞

戸籍抄本に副署のあるのは一寸變なやうであるが、冥土憲法第千百十號に據りて制定された冥土戸籍法第三萬三千三百三十三條に『地獄極樂總裁の證明書には副署を要せざるも戸籍吏の作製する戸籍謄本又は抄本には關係者之に副署することを得但し副署者は其尊屬者たることを要す』とある、右の抄本に親分幡隨院長兵衛の副署あるは即ち此條項に據つたものである。

本職は長兵衛の乾兒であるから俠客、但し小使取りに内證で博奕をやつて居たことは事實である。權兵衛が社會的に名を知られたのは長兵衛の乾分となつてからの

事で、闘犬を張殺したのが抑もで、木挽町の芝居小屋で乾兒兄弟の夢の市郎兵衛と二人で當時江戸市中を横行し、市民から蛇蝎視されて居た四谷六法白柄組の頭領水野十郎左衛門の家來の金時金兵衛、渡邊綱右衛門の兩人を踏潰し、鰌の如くキュー〳〵言はせた事件と、長兵衛が水野一派の爲めに欺討にされた敵討の中心であつた事とは彼の名聲を天下に轟かし、二大事件である。

權兵衛は市郎兵衛とが一番能く氣が合つて何處へ行くにも大抵二人連れで行く、或日權兵衛と市郎兵衛は木挽町の花居小屋に芝居見物に出掛けた。見物して居るうちに場内に一事件が起つた、と云ふのは幕間に小屋の半疊檢めがやつて來て檢べて廻つて居るうちに半疊を敷いて居ない一人の若者を發見し、其れを摘み出さうとした。半疊と云ふのは敷物の事で其時分は劇場も掛小屋で樹といふものもなかつたので、木戸錢を拂ふと一人に一枚宛の敷物を渡した。觀客は其れを敷いて見物する、故に半疊檢めがやつて來て其れを敷いて居ない者を發見した時は木戸錢を拂はずに

潜り込んだ不正者と認めて場外に摘み出すのが小屋の規定になつて居る。處が件の若者は『乃公は幡隨院の乾兒の雷重五郎だ、さア摘み出すなら摘み出て見ろ』と駄々を捏ね出した。幡隨院の乾兒と聞いては半疊檢めも縮み上り、平身低頭して謝罪したが、重五郎性來餘り怜悧でない上に、一杯飲酒して居るので、恥を掻かせたと云つて愚圖つて居ると、丁度其時長兵衛と睨合をして居た、水野一派の二十餘人が見物に來て棧敷に陣取つて居たが、水野の家來で豪傑の聞えある金時金兵衛がヅカ〳〵遣つて來て雷重五郎の襟を掴んで宙に引立てゝ、

『コリヤ蛆虫靜がにしろ、大金の掛つた芝居狂言を邪魔するとは怪しからん、長兵衛が左樣な事を吒咐けたか、汝のやうな虫類同然な奴は、五疋十疋集つても相手に成らん、長兵衛を呼んで來い、長兵衛ならば一疋でも相手にしてやる、町人の分際として人の稼業を邪魔する不埒者、來い』

とずる〳〵引摺つて行つて鼠木戸から往來の眞中へ『一昨日來い』ヅンデンドー

と投り出した、見物一同は此騒動でワオ〳〵騒いで居た。金兵衛は得意滿面、花道に突立つて『サア初めろ〳〵、皆な騒ぐな静まれ〳〵』と一同を制した。此傲慢振りを見たのが唐犬權兵衛に夢の市郎兵衛だから堪らない。權兵衛はズイと花道に上り傲慢面して静まれ〳〵と云つて居る金時金兵衛の背後から、鐵塊の如き拳骨で金兵衛の横面をグワーンと食はした。金時は逆とんぼ打つて見物席へ轉げ落ちた、『失禮者ッ』と金時が起上らんとする奴を權兵衛襟髪を掴んでズル〳〵花道へ引上げ首つたまへ右の足を掛けてグイと踏みつけた。足柄山の金時より大分弱い。

『コレ無禮すな、汝ア誰だ』と藻掻いて見ても罠に掛つた鼠同然、踏潰された龜の子の如く手足をバタ〳〵、權兵衛懐手の儘悠然として、『誰でもねえ、幡隨院長兵衛の身内、唐犬權兵衛といふ生佛だ、汝ア先刻長兵衛なら一疋でも相手にすると吐したが、汝のやうな有象無象を相手にするやうな親分様ぢねえんだ、親玉を出せ、イヤサ十郎左衛門を此所へ突出せ、十郎左衛門なら一疋でも此の權兵衛が相手にしてやる、手前のやうな雛鶏を相手にするやうな安價い權兵衛ぢやねえんだ、恐圖々々吐しやがると踏殺すぞ』斯うなつては金時金兵衛も小田原提灯もあつたものでない見物一同權兵衛を謳歌してヤンヤ〳〵と騒ぎ立てる。此時奮然として權兵衛の背後に廻つたのが水野四天王の一人渡邊綱右衛門である、刀の柄に手を掛け危や權兵衛を扱打にしやうとする危機一髪、何時の間にか渡邊の背後に突立つた夢の市郎兵衛。渡邊の刀の鐺を掴んでグイと突上げた、渡邊は拔かうとする途端に突上げられたので自分の刀の柄頭で自分の顎を、でんぐり返る程グワンと突上げた、『何とするッ』と云はうとしたが顎が痲痺れてアッ〳〵と云つて居る奴を、首筋をグイと掴んでギユーと捻ぢ伏せ、權兵衛同様首つ玉へ足を掛けてグイと踏つけ、『ヤイ小僧、手前は乃公の兄哥の背後へ廻つて何の眞似をさらす氣だ、乃公を誰だと思ふ、長兵衛の身内で夢の市郎兵衛といふ生神様だ、ヂタバタすると踏潰すぞ。』權兵兵は後ろに市郎兵衛の聲がするのでヒヨイと振り向くと市郎衛兵が綱右衛門の首つ玉を踏付け

てニコ〳〵して居る、『市郎兵衛何をした』『何だか知らねえが妙な物を踏付けた』『何を踏付けた』『何だかムク〳〵動いて居る、墓みたいなものらしい。』『さうか、ぢや乃公に貸して呉れ』。『何うするんだ、斯んなものを。』『何でも宜いから一寸貸せ。』と大力無双の權兵衛、バタ〳〵して居る金時の首筋を右手にひつ掴み、ウヨ〳〵して居る綱右衛門の首筋を左手にひつ掴み、宙に持つて額と額をカチン〳〵と鉢合せさせると、パッ〳〵と火花を散らしてヒー〳〵、見物一同火花を見てオヤ〳〵雷光だ夕立ではないかと驚いて居る、權兵衛二人を宙にブラ下げ鼠木戸の所まで持つて來て頭と頭を、拍子木の代用チョン〳〵チョン〳〵と幕にしてしまつた。

水野を始め白柄組の連中も、此の破天荒の荒仕事に度膽を抜かれ、呆然として爲す處を知らず、コソ〳〵と逃げ歸つた。權兵衛の遣り口は萬事此の調子。然し弱い者と來たら身の皮剝いでも扶ける、憐れな者であつたら何處までも庇護して遣る、長兵衛の一の乾兒丈けに萬事長兵衛張り、親分の面に泥を塗るやうな眞似はしない

俠魂義睨は此の男の生命であつた。此の芝居小屋の一件は長兵衛と水野一派の白柄組との間を一層險惡ならしめる重大なる原因となり、遂に長兵衛が水野邸の湯殿で欺討にされるに至つた。權兵衛は市郎兵衛と共に中心となつて腕利の乾兒數十名を引連れ、水野の邸に斯込み、茶々無茶に暴れ、遂に水野が將軍より切腹を命ぜられ、家斷絶せしめられる痛快事をやつて長兵衛の敵討をした。芝居では斯込んだ時最後に水野が殺されることになつて居るが、事實は然うでない。水野は其時命から〳〵逃げ出したが、此事件が將軍家の耳に入つて切腹家斷絶を仰付けられたのであると、權兵衛から吾輩の處へ來た手紙にも然う書いてある。水野が死んで閻魔さんから訊問された時に白狀した所も然うであると閻魔さんからも、證明書がある。

◎小金井小次郎

先づ戸籍抄本から御目にかけ申さう。但し斷つて置くが、之れは吾輩が今般大枚十

萬億圓の手數料を支拂ひ、冥土の閻魔廳から態々取寄せたものゝ中の一つであるから、仇忽かに拜見すると罰が當る。其積りで愼重な態度を以て御覽を願ひたい。

戸籍抄本

原籍地　櫻の名所武藏國多摩郡鴨下村字小金井

現住所　極樂町俠客横丁二丁目六番地

婆婆での商賣は扶弱挫强の俠客業、内職は天下の御高札の裏を渡る博尖打

小金井小次郎

妻　おせき

右抄本は戸籍の原簿と一分一厘の相違なし夢々疑ふこと勿れアーメン。

無限元年十七月七十五日

地獄極樂の戸籍監督總長　閻魔大王印

今では冥土極樂寺の前の空地に製粉會社を起し三百人からの職工を使ひ、盛大にやつて居る。先日某總理大臣の處へ物價調節の爲め百萬袋ばかり輸出してやつてもよいから、必要だつたら打電して貰ひたいといふ長文の電報が屆いたさうである。諸君の中で特約販賣をしたい者は前記現住所宛端書一本飛ばせばよい。但し郵便料が滅法高いから其積りで……。

櫻の名所武州小金井の小次郎とは優に優しい詩的であるが、義俠の爲めには人間を斬ること大根か午蒡の如くと云ふに至つては聊か殺風景たるを免かれない。妻君おせきは武州八王子の眼鏡家に居た華魁で、初見世のイの一番に登樓つた客が小次郎親分、すつかりおせきが氣に適つて買占めと云ふ勢、おせき華魁の方でも小次郎の氣象に神聖なる戀をして落籠され、遂に大願成就して小金井小次郎の合夫人となつたのである。

今日でも講釋師浪花節語りの飯の種になつて俠客崇拜黨に有難涙をこぼさして居

る丈けあつて、天保時代に於ける關東俠客の第一人者と謳はれた俠客專門家である。當時小次郎崇拜黨が南無阿彌陀佛よりもアーメンよりも有難がつた義俠振りを一つ紹介しよう。おせきが母の病の爲めに苦界に身を沈めた後父の新兵衛、娘の身代金五十兩で病人の手當をしたが死神に負債があつたものと見えて病人は間もなく死んでしまつた。女房には死なれ娘は苦界の勤め、新兵衛爺さんすつかり氣を腐らし、家財道具を賣拂つて末は野末の露と消ゆるか鳥の餌食となるか、自棄半分の西國巡禮に出掛けるつもりで娘の所へ暇乞ひに行つた時、小次郎が居合せ、おせきからそれと聞いて新兵衛爺さんに意見をして決心を翻させたが、其時の小次郎の言葉は斯うである『ア、爺さん、言ひ後れたが私は櫻の名所の小金井といふ所に居る小次郎といふ者だが、緣あつてお前の娘と馴染を重ねて居るんだが、今娘が來ての話に是々斯う〳〵いふ譯、夫ア お前も力を落したらう、落膽したらう、けれども夫ア大變な心違えだぜ、野末の肥料と覺悟をして、行く先き定めぬ旅の空、出て行くお

前は夫れでも宜からうけれども、跡に殘つた此の娘が何樂しみに苦界の勤めが出來る、お釋迦樣に說法するようなものか知らねえが、娘が止めるのも道理だ、そんな馬鹿な事を爲ちア往けねえ止しなさい、何處へ往つたからつて馴れた故鄕に越した事はねえ、故鄕忘れ難しとやら云ふ事もある。決して惡い事は言はねえ、巡禮などは止しなさい、夫ア唯止せと云ふんぢやアねえ、叱言は云ふべし、酒は飲むべし、お前が乃公の言ふ事を聞くなら、馴染を重ねた娘の身洗ひを付けてやるから、故鄕の木更津へ歸つて父娘睦まじく、縱令貧しく三度の物を二度にしても父娘二人で暮しなさい。』

と云つて眼鏡家の主人を呼び、親許身受で話をつけ、右から左へ五十兩の金を渡し年期證文をビイーツと破つて新兵衛に渡すといつた遣り口。是れでは新兵衛が幾ら旋毛を曲げてヂタバタしようと思つても一分一厘の餘地もない。お釋迦樣以上の有難味は即ち茲に在る。

回夢の市郎兵衛

戸籍抄本

原籍地　江戸淺草花川戸

現住所　日本の極樂俠客通一丁目十番地

職業　（諸家人入業）（兼俠客）

夢の市郎兵衛

右抄本は婆娑冥土兩戸籍謄本と相違する處無し南無アーメン法蓮陀佛

地獄極樂の戸籍吏監督官　閻魔大王印

幡隨院長兵衛と同時代の俠客であるが、長兵衛が漸やく賣り出した頃は既に親分

として江戸中に鳴り響いて居た。放駒四郎兵衛の弟で放駒と共に長兵衛の乾分となつた。唐犬權兵衛とは大の仲善し、眞の兄弟も唯ならぬ睦じさで、何處へ行くにも大抵一緒であつた。木挽町の山村座で水野一派と衝突した時も二人一緒であつた、夢の市郎兵衛といふのは綽名で其れが通稱となり、自分も夢の市郎兵衛で納まつて居た。綽名の由來は夢のやうに茫乎して居るからでもなければ、毎晩夢ばかり見て居るからでもない、又夢を見て俠客になつたといふのでもない、身體に入れた文身に由つたものである。即ち脊中に地獄、胸に極樂、左の二の腕に『寢返りをすれば忽ち極樂も地獄と變る夢の世の中』といふ奇拔な削青をして居たからである。

此人の傳にも種々異說があつて、長兵衛よりもずつと以前で、長兵衛が賣り出した頃は既に死んで、居なかつたといふ說もあれば、長兵衛と同時代であるが、長兵衛よりも先輩であつたといふ說もある。又長兵衛より先輩ではあつたが長兵衛の人物に敬服して子分となつたと云ふ說もあれば、長兵衛と兄弟分となり市郎兵衛の方が

先輩で年齢は多かつたが、弟分になつた、といふ説もあるといふ風に區々として一定して居ないが、長兵衛より先輩で年も多かつたが、長兵衛に敬服して子分になつたといふ説が眞實のやうに思はれる。又山村座で唐犬權兵衛と二人で水野の家來金時金兵衛と渡邊綱右衛門を取挫いだのは嘘で、「それは長兵衛親分であつたといふ説もあれば、矢張り市郎兵衛權兵衛の二人であつたといふ説もあるが、これも矢張り長兵衛親分であつたといふ説の方が嘘らしい。何故かといふと長兵衛は沈着な男で水野ならば兎に角、水野の家來などを相手にして、何う斯うするなどの男ではなかつたからである。講釋師によつて吹聽される傳記は、揑造が多くて悉く信用するに足らない。史料が散逸して仕舞つて居るので、今日眞相を摑むことは甚だ困難である。今年の夏は避暑旁是非冥土旅行をして見たいと思つて居るから、其時會つてよく聞いて見よう。その時は、冥土加行記を出版しやうと思つてゐるから、寢て待つて居給へ。

回放駒四郎右衛門

戸籍抄本

原籍地　江戸淺草花川戸

現住所　日本の極樂俠客通り五丁目九百九十九十番地　放駒四郎右衛門

娑婆での職業　〔初め力士、後ち俠客に轉業〕

右抄本は娑婆冥土兩戸籍原簿と相違なきことを認證す

地獄極樂の戸籍吏總長　閻魔大王印

百姓の倅から力士になり、大關まで取り進んだが、引退して最負の旦那の世話で植木屋になつたが、弟が夢の市郎兵衛で俠客の親分であつたのと、持つて生れた義

俠心とは、盛んに四郎兵衛の心を煽り立て、とう〳〵植木屋をやめて俠客に鞍替へ、弟の市郎兵衛と提携して男を賣出し、長兵衛出づるに及んで其子分となり、長兵衛四天王八天下の一人として活躍した、無論水野の屋敷へ仇討に斬り込んだ一人である。此人の傳記も捏造が多くて眞僞の境界線が明瞭でない。其中會つて本人からよく聞いて見よう。

◎緋鯉の藤兵衛

戸籍抄本

原籍地　江戸下谷谷中

現住所　日本の極樂町俠客通り三丁目八番地

職業　俠客　二代目　緋鯉の藤兵衛

妻　お仙

職業　婆婆での　（徳川四代將軍家綱の乳人）　姉　矢島局

右抄本は婆婆冥土の戸籍原本と相違なきことを認證す、匆々頓首あら〳〵かしこサ、ホーカイ。

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王　印

證人

在冥土　四代將軍　德川家綱　印

在冥土　老中首席　松平伊豆守信綱　印

緋鯉の藤兵衛には初代二代三代まである。初代緋鯉の藤兵衛は寛永正保時代に大江戸に活躍して俠名を賣つたもので武士出身の男伊達、二代目は慶安寛文時代即ち幡隨院長兵衛の時代に男伊達として、鳴り響いた鋼骨漢。三代目は寛文の末から正德

へかけて活躍した痛快男子。但し三人共血族的何等の關係もない。此事は誤解しないやうに書いて置いて貰ひたいと目下冥土に居る三人から云つて來て居るから一寸茲に前以て斷つて置く。

茲に紹介する緋鯉の藤兵衛は二代目で幡隨院長兵衛時代に賣り出し、長兵衛の死後江戸隨一の俠客と謠はれた男伊達である。谷中に居たので一名谷中の藤兵衛又は谷中の長兵衛とも謂はれた。實姉は春日局に引立てられて德川四代將軍の乳人となり、大奥に於ける勢力は素晴しいもの、隨つて緣に繫がる藤兵衛も奉行其他の役人から非常に寛大に見られて居つた、又町奴を目の敵にして喧嘩を吹掛ける旗本の阿婆摺連中も一目星いて大抵の事は、觸らぬ神に祟なしで我慢して居た。

左う云ふ事情などが手傳つて緋鯉の藤兵衛の名は益々高く、幡隨院長兵衛の死後は、此緋鯉の藤兵衛の世界であつた。而も彼は軀幹長大にして腕力抜群歩くときは仁王が搖ぐかと疑ふばかり、着流した着物には照柿色の緋鯉が潑剌として跳ねて居

る。而も兩眼は銀の摺込み、鱗は皮形の間に金の摺込み、頭髮は撥鬢、額は藤兵衛獨特の金魚額、といふ寵形、其男らしい伊達姿には江戸中の若い女の戀心をそゝつた。或眞夜中、藤兵衛の門口をホト〳〵叩くものがある藤兵衛の子分が起きて出て見ると十七八位の素敵な美人が立つて居る。用を聞くと此手紙を藤兵衛さんへと云つて一通の手紙を渡した。何方樣から……とヒヨイと見ると天に消えたか地に潜つたか影も形もない、子分、狐につまゝれたやうな顏して藤兵衛の所へ手紙を持つて行つた、藤兵衛もハテナと思つて封押切つて見ると、豈圖らんや不忍池の辨天樣からの戀レターであつたといふ、そんな事は恐らく根も葉もない嘘八百に違ひないが、藤兵衛の伊達姿に戀した女は少くとも千人や二千人でなかつたこと丈けは眞實らしい。

これに比ると吾輩などは豪氣なもので、臍の緒切つて以來女に惚れられた事は夢にもないのであるから心細い。吾輩の友人は女が一向に神聖な戀をして呉ないので、藤兵衛のやうに燦爛たる着物を着て往來を歩いたら天下の美人どもが束になつて神

聖な戀をして呉るだらうと思ひ、登龍に降龍を、も一つおまけに鯉の瀧登りを金糸銀糸で刺繍にした華魁の打掛のやうなものを着て歩いて見た、處が神聖な戀どころか忽ち巡査に捕まり、オイコラそりや何ちう服裝か、其んな變な服裝をして往來を歩いちや不可ぢやないかアーン……で警視廳に三日三晩留め置かれ、散ざお目玉を頂戴させられた上句、一昨日お出と投り出された、と夢に見たさうだ。

元來俠客は武士の專横强者の壓制に反抗し理を理とし正を正とし弱者の味方となり弱者の庇護者後援者たらんとして起つた義心俠魄の權化、隨つて自ら好んで喧嘩は賣らぬ、非理に賣られた喧嘩は買ふが、好んで平地に波瀾は起さぬ、義の爲めには水火も辭せず、仁俠の爲めには生命知らずに猛進する、俠客の眞價は即ち其處にある。緋鯉の藤兵衛も幡隨院の死後江戸隨一の大[illegible]謂はれた男伊達、谷中の子子を食つて生きて居る緋鯉でござると謙遜しても[illegible]吹けば金鐵の響を發し、打てば爆發して當るもの觸るもの粉碎せずんば已まない、散れば萬朶の櫻となり、凝つては百

錬の鐵となる、大和魂の眞骨頂、懸値のない日本男子の見本である。

花の大江戸將軍の膝下を、伊達着姿の長脇差、蕭しに差して濶歩しても、扶弱挫强以外に心は躍らぬ。幡隨院長兵衛が水野の爲めに欺き殺されて以來、彼れの胸中に波打たせるものは、水野一派の雁首を叩落して大親分長兵衛の靈魂を慰め、旁々江戸に於ける旗本と町人の反目衝突を根絶せんとするにあつた。殊に幡隨院を殺した水野等が何等の制裁も受けず、長兵衛は町奴の分際で、天下の旗本に推參な振舞を致したに由つて無禮打ちに致した、と聞くのが何より癪であつた。

幡隨院長兵衛が殺されて約一年、長兵衛の乾兒の一團が水野の邸に斬込み、水野の家來及屋敷の内外を警戒して居た町奉行所の組子等十數人を斬倒したが、目的を達せずして召捕られ、入牢申付けられた事件は大江戸八百八町の全市民を震憾せしめたが、事件が事件丈けに將軍の耳に入り、旗本に楯突く町奴とやらを見たいと、松平伊豆守に内命を下し、伊豆守は將軍の乳人、矢島局に因つて局の弟緋鯉の藤兵衛

を千代田の大奥に呼び寄せた。

伊豆守は智慧伊豆と謂はれた程の人物、藤兵衛の陳述によつて旗本對町奴の葛藤の眞原因を確かめ、水野一派及入牢中の長兵衛の乾兒處分の參考にしようと云ふ下心であつた。將軍家綱夫妻は御簾の裡から藤兵衛が伊豆守と話して居る處を見て居たが町奴とやらの膽魂精の見られるやうな面白いことをさせて見よと侍女をして伊豆守に傳へしめた。藤兵衛は心中待つてましたとばかり、『御所望の通り手前の持合せて居ります膽魂精で、天下廣しと雖も町奴の外するものゝない、妙々不思議珍竹林の藝當を御覽に入れます』と云つて懷中に忍ばせて來た合口で腹十文字に搔さばき十五年以前から『夜更けて通るは何者ぞ、加賀爪甲斐かさては、阪部の三十か』と落首が江戸中に唄はれて居るのを御存じないかと、旗本の兇暴を痛罵し水野の首を刎ね、白柄組に對して致命的處分を行ひ、直參を笠に着、虎の威を借る旗本を取締るにあらずんば、旗本對町奴の對抗爭鬪は素より、江戸に血の雨降らし喧嘩騷動の根

絶することはないと、將軍の面前に於て直言痛論、伊豆守をして言句なからしめ、最後に『これが町奴の膽魂精でござる』と臓腑を掴み出して伊豆守の鼻の先へ突つけた。伊豆守は素より一座呆然として言句なく、町奴の心膽如何にも俠客の名に背かざるを痛感せしめた。將軍は直ちに閉門謹慎中の水野十郎左衛門に切腹家名斷絶、其他の者は半知乃至闕所の處分を行ふべきを伊豆守に嚴命した。

其結果水野十郎左衛門は其翌月(寛文四年三月)臺命によつて切腹し、家右は斷絶其他の者は半知乃至闕所になつた。入牢中の長兵衛の乾兒一同は公判に附られ、審理の結果悉く遠島の刑に處せられた。これで寛永以來次第に募つて極度に達してゐた、旗本對町奴の爭鬪格鬪の慘劇は、煙卓の吸殼に小便をひつかけたやうにパッタリ消えて煙も立なくなつた。而して江戸は眞に天下泰平の江戸となつた。緋鯉の藤兵衛の名は生前に增して市民の間に謳はれた。

因に云ふ。緋鯉と云ふ綽名は金魚組の親分であつた所から來たもので、子子や獃

を食つて居た譯ではない。嗚呼偉なるかな緋鯉の親分、噫雄なるかな谷中の藤兵衛どん。

回大前田英五郎

戸籍證明書

原籍地　上野國南勢多郡大前田村

現住所　日本の極樂俠客横丁六番新道

婆婆での職業は　博奕打兼俠客

現職　冥土度量衡商

婆婆での職業　名主兼素人相撲

大前田英五郎

本名　田島英五郎

父　田島允五郎

母　おきよ

婆婆での職業　名主

祖父　新之亟

兄　要吉

右は冥土の戸籍原簿に照合し爪の垢程の相違も無きものなり、十方婆婆の人々夢々疑ふべからず、

戸籍吏閻魔大王ペスト病に冒され、目下入院加療中に付、此の證明書を下附するものなりあら〳〵かしこ。

十萬億土地獄極樂總裁　阿彌陀如來　印

俠客の戸籍調べも局外者から見るやうに樂なものでない、一人について戸籍から生前の事まで嚴密に確實に調査するには好い加減手數が掛る、而も其手數料一切著者が自腹を切らなければならないので、物價騰貴の今日甚だ容易でない。

此大前田英五郎の戸籍取調についても、出張取調べを行ふべきであるが、便法に

より、特別書留速達郵便で目下冥土に居る英五郎の實父、田島久五郎に問合はせた處が、久五郎は早速返事を寄越して曰れた、依て左に久五郎の書簡を披露して叙述に代へる。

拝復、物價益々騰貴し娑婆の人間其七轉八倒四苦八苦塗炭に苦しみつゝあるの候尊臺も亦愈々益々御健祥とやらの羨我慢を致され居候由大慶至極に慨察奉候、扨て特別書留速達郵便にて御照會の俠客大前田英五郎生前並に死後に關する件承知仕候。元來英五郎は小生の二男にて小生は彼の父に相當り、小生の妻は彼の母に相當り、小生の父は彼の祖父に相當り、小生の長子は二男たる彼の兄に相當り候間先づ是れ丈けは基礎觀念として第一番に、貴下の腦味噌に注入致し置かれ度候、

英五郎の祖父即ち小生の父は名主を勤め沈香は焚かず屁ばかり放つて一生を終つた凡倉者に候へども、小生は流石關東一の大俠客、大前田英五郎を製造した人物だ

けありてナカ〳〵の人物に有之候、小生は父の跡を繼ぎ、名主役を勤め候へども相撲が三度のお飯より大好き、遂に名主株を二束三文に叩き賣り、常習無職渡世の開祖大久保村の田中大八の乾兒となり、素人相撲の群に投じ、瀧昇と名乗り各地に轉戰致候ひしが、小生が弱ければ相手が勝ち、相手が弱ければ小生が勝ち曾て一度も負けたる事無之候、劍術は馬庭念流の開祖樋口十郎左衛門先生について修め先生と五分五分の勝負を致候程の腕前に候。然し小生が聊か閉口したるは、小生は至つて小兵の男、之に反して妻は脫線式の大女、體格偉大にして身の丈六尺に足らざること僅かに一分五厘、爲めに世間の奴等が蚤の夫婦〳〵と評判いたした事に御座候。然れども此親にして此子あり、斯かる豪者の小生が急に念を入れ奮戰努力して養育したる丈ありて、二男の英五郎は立派な者にて我ながら何うして斯んな豪物が出來たかと感嘆致候、而も母に似て身の丈六尺に近く體格偉大にして力拔群、馬庭流の劍術も免許以上の腕前、お褒め下され度候。

英五郎二十二歳の文化九年七月、博徒の親分にして惡蛥良民を苦しめたる上州久宮の清八を殺し、逐電して十年間諸國を流浪し、三十二歳の時江戸に於て捕はれ佐渡に流され候も、目から鼻へ抜ける程の鋭利な英五郎の事故、役人を扶助し囚人を庇護し、囚人支配人島右衛門の不正桝使用の犯罪を摘發し、金盤（不正を豫防する爲めの金屬製の桝）を發明し、功勞によつて支配人に抜擢され候へども郷里に殘れる兄要吉を案じ、囚人三名を共謀して一夜暴風雨を機會として首尾よく脱島致候ひしが、佐渡ケ島總取締役人遠藤次郎左衛門爲景、英五郎の勤勞に免じて見遁し呉れ候、此遠藤次郎左衛門は北面の侍、遠藤武者盛遠より四代目、日蓮上人の弟子となつた遠藤左衛門爲盛入道阿佛坊十九代の孫にて血あり涙ある武士に御座候。

一旦郷里に歸り、疱瘡の神に可愛がられて盲目となれる兄要吉に會ひ、勝五郎と僞名して名古屋に潜伏する中、大火の爲めに日本名物の一たる名古屋城の天守閣

が灰燼に歸せんとする危險に陷りたる際、英五郎挺身防火に努力し、事無きを得せしめ候、此目覺しき活躍を國家老瀧川豐後守目擊し、在江戸表の尾張大納言に具申し、大納言より將軍に嘆願し、英五郎佐渡破りの罪赦免と相成、尾張家よりは、伊勢は津で持つ津は伊勢で持つ、尾張名古屋は城で持と謳はるゝ名城を火災に超然たらしめたるは之れ英五郎の奮闘活躍に依るもの、其功戰場に千人の首級を擧げたるより偉なりと稱揚せられ、大小霰の陳羽織同く袴を賜はり候。尾張大納言の言の如く、忰英五郎は名古屋城の恩人、金の鯱鉾を救ひたる生命の恩人に御座候、此二品は先祖傳來の寶物、五郎正宗の合口及長曾禰小徹の脇差、並に宇多國宗の槍の身三品と共に家寶となり、今猶田島の家に傳はり居候。

名古屋城の將に燒死せんとするを救ひたる壯擧は英五郎復活の機會となり、俠魂義魄を看板として再起し、關八州に俠名を轟かし候、以上は大體の概略の掻摘んだものにて候。現在は冥土に於て冥土用の度量衡商人となり堅氣に暮し居り

候、それで本人も安心、女房子供も安心、共に私も佛樣も御安心。猶、戸籍謄本との御申越しに候ひしも、戸籍吏閻魔大王ペスト病に冒され命旦夕に迫り、目下冥土病院に入院治療中、代理を勤むる者も看護の爲め不在、己むを得ず別紙阿彌陀如來總裁閣下の戸籍證明書相添へ此段及回答候ものに有之候、尙ほ不明の點は、何なりとも御問に任せ返事申上べく候。匆々。

親馬鹿ちやんりんとは云ひながら、斯う猛烈に手前味噌を摺られては、吾輩も提灯のつけやうがない。

◎釣鐘彌左衛門

戸籍抄本

原籍地　安藝國廣島城下

轉籍地　江戸芝區濱松町

釣鐘彌左衛門

慶長十九年正月十五日生

坊名　林彌吉

實父　福島正則の家臣　祿高千八百石　林彌三郎

實母　お勝

養父　備中松山城主水谷出羽守　富田屋清六

出入、人入元締

右確實にして、些少も間違無之候也

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王㊞

父は戸籍抄本の示す通り福島正則肱股の忠臣林彌三郎、千八百石の高祿を食んで居たのであるから、世が世であれば立派な若殿原で居られるのであるが、元和九年

に福島家が取潰され、主人正則寛永九年に川中島で病死をして家は斷絶し、彌三郎は高野山の麓學文路宿で二十九歳といふ先途有望福島正則脇役の一臣千八百石林彌三郎の特別念入製造の一粒子、無事に行けば若君樣で押しも押されもせぬ立派な武士になれるのだが、主家が潰れて父が殉死追腹を切つて冥土へ左樣ならをして仕舞つた爲め、若君樣に成り損ねて仕舞つた。彌三郎で死際の遺言に彌吉（彌左衛門の幼名）は決して武士にして呉れるな、とあつたのを守つて母に連れられ江戸へ流れ込み、彌左衛門は旗本松平九十郎の家に預げられたが、二十五歳の時、芝愛宕で一刀流の先生小野二郎衛門の門人三人を斬殺し四人に重傷を負はせたので、松平の家にも居られなくなり、まゝよ三度笠横ちよに被れと、父が遺品の備前長光の一刀を唯一の財產として腰に打込み、跡は野となれ山となれ、首が欲しくば一昨日おいでと、松平の家を飛出し、東海道を徒歩つて上方へ向ふ途中、彌三郎から恩を受けた芝濱松町の人入元締富田屋清六に出會し、厄介になつて居る中に情意投合して清六の養子

となり、俠客學の專門研究に取りかゝつた。何が扨大力無双で劍術は師匠無しの天下無敵、度胸があつて太ッ腹、俠客には誂向きの資格、忽ち富田屋の若分親と人にも呼ばれ自分も許す程になつた。

然し是れ位では八百八町の有象無象共を呼と云はせ、隨喜喝仰の有難涙や水鼻を流させるには至らない。彌左衛門雷名を轟かせる機會あれかしと待ち構へて居ると深見十左衛門の悴十三郎と土岐與左衛門とが吉原三浦屋の華魁小紫太夫の事から暗闘が初まり、十三郎の方に俠客放駒四郎兵衛が味方をして土岐に小紫を思ひ切らせやうとして土岐の爲めに額に疵をつけられたので、放駒が承知せず、勿論、兄弟分の夢の市郎兵衛、唐犬權兵衛などの俠客の親分連が、猪口才なる武士め、手前の爲を思つて爲て遣らうと云ふのに男を賣る者の額に疵をつけるとは生かして置くべき獸物でないと敦圉き、七十餘人の乾兒を連れて吉原へ乘込む、土岐の方では仲間の浪人に廻狀を廻して、これも八十餘名吉原に集つて三文奴の分際で天下の武士に

楯突くとは洒落臭い一人殘らず塵殺して仕舞と手具脛引いて待ち構へ、アワヤ血の雨降らす一大騷動の幕が切つて落されんとする形勢に迫つた。折も折なら時も時、丁度其日は神田大和町誓願寺の釣鐘供養式で、吉原廓内一同藝者末社打揃つて誓願寺へ行かうと、大八車に四五十貫もあらうといふ釣鐘を載せ、それを牛に牽かせてイザ繰出さうとして居る所へ此騷ぎ、出るに出られず、何うなる事かと、ワイ〳〵騷いで居るので。騷ぎが一層大きくなつた。彌左衛門は子分三人を連れて向島へ花見に行つた歸途、此騷動に出會した。すると彌左衛門横手を打つて喜び、『さア野郎共乃公が大江戸八百八町の我樂多共を唸らせる時が來た、これを持つて見物して居ろ』と手早く着物を脱ぎ褌一貫になつて備前長光の業物を打込み、突然迷兒〳〵々々して居る大八車の上の釣鐘を兩手に摑んでウンと差し上げ、退いた〳〵と人押分け、南方睨合つて居る眞中へノッシ〳〵現はれた。浪人連も驚いた、オヤ〳〵素晴しい奴が現はれた、見れば武士でもなさうだが、素裸で而も釣鐘を輕々と差上

げるとはオッ魂消た奴だ、何者だらうと見て居ると、彌左衛門は其釣鐘を突然浪人組の眞中へ抛り込んだ。浪人組はソーラ飛んでもない亂暴者が現はれたとサッと後へ退く、同時に釣鐘は地上落ちてガンガラガン〳〵ガーンと凄まじい音でゴロ〳〵轉がつた、これには浪人連も町奴連も呆氣に取られて手を束ねて見て居る外はなかつた。彌左衛門は仲の釣鐘を伏せ龍頭の處へ仁王立ちに突立ち兩手を廣げて『ヤー此喧嘩は乃公が貰つた、何う云ふ喧嘩か知らねえが今日の處は乃公に任して呉れ、乃公は吝な野郎だが芝の富田屋彌左衛門といふ者だ』と破鐘のやうな大蠻聲を張上げて奴鳴つた、浪人連も町奴連も釣鐘の藝當に度膽を抜かれて聊か拍子抜けをして居た所であるから。放駒は次第によつては任せようと云ひ出たし、土岐もやつて來て『今の大力藝當恐れ入つた自分の方は萬事を任せる異存はない』と云つた。そこで彌左衛門が仲裁となり、三浦屋の樓上で仲直りが出來た。小紫華魁はこれも自分から起つた事であるからと、頭髪をプシッリ切て仲直りの席の眞中へ差出し放駒に

向つて、此通りであるから額の疵は何にも云はず勘忍して呉れと謝罪した。放駒も小紫の心中を察して額の疵については水に流して仕舞つた。分けて土岐は前非を悔ひ、小紫の事は今日只今より思ひ切り、落籍の問題は撤回すると云ひ、將に爆發せんとした大騒動は未前に防止された。彌左衛門は件の釣鐘を持つて歸つて、小口より捻切り味噌をつけて食つてしまつたといふが、これは眞正間違なしの嘘だ、然し家屋敷を飲んだり、娘を食つたりする奴のある世の中であるから、或は食つて了つたかも知れない、夫れは必しも、詮穿の限りでないが、彌左衛門は期待の如く此事件によつて、其名は大江戸中に鐘の如く鳴り響き雷の如く響き渡り、見る間に釣鐘彌左衛門の綽名を奉られた。

回根津四郎右衛門

戸籍抄本

原籍地　備前國下津井三百八十九番地
轉籍地　大阪堂島中町
現住所　日本の極樂俠客通り一丁目六番地
婆婆での職業　俠客　　根津四郎右衛門　幼名　藤三郎
現職　冥土俠客會幹事
婆婆での職業　郷士　　父　根津藤五郎
現職　冥土武士會會員
右抄本は戸籍の原本と一字一句も間違なきことを證明す
無限元年十四月百日
地獄極樂の戸籍吏監督　閻魔大王　印

此人は家筋が下等でない。先祖は眞田幸村に仕へた七人影武者の一人根津甚八、父は備前下津井の郷士根津藤五郎、特製とか上等と云ふ程ではないが中等以下ではない。四郎右衛門は幼名藤三郎と云つたが大兵大力、筋骨非凡で武藝がいつち好き武士や俠客には待つて來いの註へ向きである。だが藤三郎の四郎右衛門は最初武士になるつもりで、京極家の指南番、神影流の達人藤井兵右衛門の内弟子となり、七年修行して極意皆傳を受け、型の通り武藝修行に出かけたが、熟々考へて見ると武士といふ商賣も、堅苦しいばかりで餘り面白い商賣ではない、寧ろ俠客になつた方が痛快だと、廻れ右をやつて大阪へ出た。而して暫く西川屋又右衛門といふ財産家の處に厄介になり、堂島仲仕となり、三好屋四郎右衛門と改名し、すつかり町人になつてしまつた。

處が四郎右衛門、大兵强力であるから三人五人で漸と動かすやうな重い物でも片手でヒヨイ〳〵持運ぶ、怪力驚くばかり、隨つて成績もよく評判もよい。其中に不

圖した事から柳川仲仕と喧嘩し、二間半の大丸太を苧殼の如く振り廻し柳川仲仕を驚かし、二間半丸太の親分の尊稱を奉られた。これが人氣を賣出す皮切りとなり後は賣名に都合の好い事がのべつ幕なしにあつた。然し四郎右衛門は瓢六玉式人物でないから、何て間が宜いんでせうとも何とも云はなかつた。

掏賊や泥的を發見すると忽ち捕へる。但し警察へ突出しはしない、懇々說諭を加へ二朱與れて放免にしてやる。これが又もや評判になつて、二朱の親分と云ふ尊號を奉られて、爾來四郎右衛門に捕まつた掏賊や泥的は、大抵改心して他人物品無斷借用株式會社の株を賣つて仕舞つた。警察や監獄よりも効力がある。吾輩が四郎右衛門の戸籍抄本下附願を閻魔廳に差出した時、閻魔樣から添手紙があつて其中に四郎右衛門は掏賊や泥公を改心させるに妙を得た男であるから、冥土では四郎右衛門に四郎右衛門丸と云ふ丸藥を拵へさせ、それを地獄に輸出し、掏賊や泥公に服用せて居るが效顯驚くばかりである、二三服送つて見るから試驗的に呑ませて見るやうに

警視廳に注意したら何うか、よかつたら、幾らでも送る、冥土では輸出入禁止などは絶對にやらない方針だから、其邊の心配するな、何うも近頃のやうに惡人が殖えては、地獄が手狹になつて近々擴張しなければ收容に困難である、娑婆でも貸家拂底で家賃がベラボーに騰貴したさうだが、冥土でも地獄の方だけ一割値上げしようかと思つて居る。娑婆の警察で四郎右衛門丸を使つて少くとも掏賊と泥公丈けでも少くして呉れると地獄省の方でも大分助かる、是非至急娑婆警視廳へ交渉して見て呉れと書いてあつた。

閻魔さんが送つて呉れるといふ四郎右衛門丸藥が到着たら警視總監に交渉して見ようと思つて居るが、丸藥がまだ到着しない。何でも赤行囊に入れて送つたといふから、泥的遞送人に途中で抜き取られたかも知れない、と心配中である。

四郎右衛門は仲士の親分であるから、博尖などは打たなかつた。己むを得ない場合は喧嘩もしたが、喧嘩して負けたことはなかつた。大抵弱きを助け强を挫き、紛

議や喧嘩は仲裁して聞く治め、貧民窮者は救護してやる、惡人は意見して改心させると云ふ、俠客の名に背かぬ眞箇の俠客であつた。それが爲めに度々奉行から表彰された。

後年相撲年寄となり、朝日山四郎右衛門となり大阪相撲界の改革を斷行した。今日大阪の朝日山と云ふ名跡が殘つて居るが元祖は此根津四郎右衛門の朝日山四郎右衛門である。根津米と云ふものを大阪に殘したのも、矢張り此の根津四郎右衛門である最近、四郎右衛門の社會的功績を表彰する爲め、正一位根津大明神に祠り、其子孫は男爵を授けられるさうだとも何とも噂はないから敢て心配するに及ばぬ。

子分には腕の喜三郎、奴の小萬を初め一騎當千の剛の者が尠くない。現在は冥土で冥土俠客會の幹事を勤めて居るが、娑婆での遣り口が然ういふ風であつたので、冥土でも身を粉にして衆の爲めに盡し、至つて成績がよい。今度會長幡隨院長兵衛の奏請で阿彌陀樣から勳二等五光中綬章を賜り、猶益々冥土の爲めに盡力せよと

の優握なる慈言を賜はつたさうである。

回夕立勘五郎

戸籍抄本

原籍地　武藏國豐多摩郡目黑村碑谷谷

轉籍地　江戸麹町區飯田町

現住所　日本の極樂俠客横町暴れ馬小路

職業　大名屋敷人入元締兼俠客

現職　極樂の調馬師

夕立勘五郎（伊賀屋勘五郎）

右抄本の確實なること、路邊の石地藏が絶世の美人を見ても戀せざることの確實なるに同じ、南無於無烈勞烈素敵美婦的奴豬路間加世乃獨戀庶

地獄極樂の戸籍吏監督　閻魔大王印

生れは野武士の子でもなければ鯉節の粉でもない、況んや將軍の公卿や落胤などといふ、曰く付の尊い素性では猶更ない。今日ビールと不動樣で有名な東京府下目黑碑文谷の土百姓、官僚式眼鏡を掛けて見れば、鐚一文の價値もない土堀芋堀糞掴み野郎に過ぎないが、大力で且つ習はざる劍術の達人、生涯碑文谷の土百姓で終るのは詰らないと、百姓を自由廢業して江戸へ飛出し、雲州松江城主松平出羽守人入元締伊賀屋傳右衞門に惚込まれて養子となり、伊賀屋勘五郎となつた。夕立といふ綽名は夕立を降らせる神通力があつたといふ譯ではない。二十五六の頃、出羽守の愛馬で會津九ノ戸產の夕立といふジャレ馬、一旦御機嫌斜になつて暴れ出したが最期、何奴此奴の容赦はない、往來へ飛出して通行人を蹴飛し跳飛し、食ひつき嚙みつき踏み殺すといふ猛獸のやうな荒馬を一擧の下に擲り殺し、出羽守怒つて手討に致すと云ふを泰然として人が大切か馬が大切かと苦言を呈し、出羽守を凹ませ感心させ、夕立勘五郎の名を天下に轟かせた處から見れば凡倉どころか痛快の塊りのやうな男であ

ることが分る。近代語で云へば俠客成金である。

平生は温厚君士人の如く、一旦怒れば鬼神も悪魔も捻ち殺して、ガリ〳〵食つて仕舞ふといふのであるから、鬼や悪魔の多い今日勘五郎を再來せしむれば其効能は千の宗教家萬の道學生に優ること蓋し數等であらう。

弟分としては二百石の旗本株を弟に讓り勘五郎の弟分となつた變物大場佐四郎、山田屋辰五郎通稱サンバラ辰五郎、若狭屋吉五郎、佐内坂の紋十郎、田安の藤兵衛等一騎當千の猛者連があり、乾兒も、又子分まで入れると二三千人はあつたといふから豪いものだ。

今では前記の現住所に在つて、極樂の調馬師を拜命し、日々數萬頭の荒馬を訓馴して居るといふことである。

花屋金兵衛

戸籍證明書

原籍地　江戸芝區櫻田太左衛門町

現住所　日本の極樂俠客横町さくら新道

職業　妓婆での仙臺家の人入元締兼俠客　花屋金兵衛

長男　金五郎

右抄本に依れるものにして、その確實なること請合也

冥土戸籍役場副總裁　ヤーミ女史　㊞

此親分も成上り者で俠客成金の部類に編入さるべきもの、夕立勘五郎と同時代の俠客であるが、以前は芝飯倉の松平九十郎といふ八千石の旗本の屋敷に仲間奉公をして居たが、九十郎の父内記に可愛がられ、櫻田太左衛門町へ堂々たる家を搗へて

貰ひ、内記の盡力によつて一躍仙臺家の人入元締となり、花屋金兵衛として賣り出した男、手取り早く云へば人の褌で角力を取つて旨々と勝利を得たといふ側で、器量に到つては夕立勘五郎などに比べると二三枚役者が落ちる。

舊主松平内記の總領九十郎が、料理屋で武士にあるまじき振舞を爲し夕立勘五郎の爲めに取押へられたことがあるが、其時の遺恨晴恩義にからめて頼み込まれ、己むを得ず新年宴會の席上勘五郎に對つて心にもない罵倒を浴せ、酒盃を投げて勘五郎の前額に疵をつけ、舊主家に對する義理を濟ませ、罪なき勘五郎への申譯には、勘五郎の弟分サンバラの辰五郎に左の腕を切落させたといふ履歴を有つてゐる實力は兎に角として、當時俠客仲間に先輩として年長者として、相當に敬意を表されたことは事實である。

◎相模屋政五郎

戸籍謄本	
原籍地	江戸芝區芝口二丁目
分家地	江戸日本橋區樽正町
轉居地	江戸日本橋區箔屋町
隱居地	江戸京橋區新宿町五丁目
別宅	同本所區南二葉町
娑婆での職業	諸家人入元締 兼俠客
現職	冥土の喧嘩仲裁役

山中政次郎

通稱　相模屋政五郎或は相政

文化五年九月九日出生	明治十九年正月二十日お陀佛	法號	誠心院相譽祐政居士
墳墓	江戸小石川仲町常泉院		

摘要	
六代目大和屋幸右衛門夫婦丹精を凝して特別入念に育てたる精製の逸品文政二年(十三歳)相模屋幸右衛門の鍵鉾立しての懇望によつて養子となる。明治元年精模山内容堂より山中の姓を頂戴す	

摘要	
相模屋幸右衛門其妻おきよ夫婦の頗る念入に教育したる娘。即ち家附の女なり。文政七年養子付。政次郎と結婚、當日届出同日受付。由來家附の女房は嫁天下と相場は定つたものなれど、此女賢にして些しも亭主を譬に敷かず、子供敷養と家政に熱中し漸次に三男六女を生み出す。精力絶倫の女丈夫の尊稱を奉るに適切功により死んだ時極樂行二等切符を交附さる。	

多病の爲め別家	妻	おてる	
	明治十年五月三十一日示寂		
	法號	安祥院榮樹妙勝大姉	
	墳墓	江戸小石川仲町常泉院	
	長男	仙之助	

日本橋區本石町の頭取濱松屋淺尾伊兵衛(い組の伊兵衛)の女房として入籍。	長女	お春
家督相續。明治三十二年冥土旅行。	二男	道之助
芝區露月町の芭蕉膏甚五郎の女房さんとなる	次女	お照
新川の鹽船田屋廣屋正次郎の山の神となる	三女	お德
早く冥土へ里子へ遣り、目下極樂の兩親の許へ引取られて居る。	四女	早世
藤堂家の御用達富永屋次郎兵衛に嫁入りせり。	五女	お六
俳優三代目澤村百之助の細君となる。	六女	お貞
實家大和屋塚本家を相續す。	三男	新八郎

先祖は大和國の鄕士塚本姓、此定右衛門より五代前の塚本定右衛門江戸に來て人入業を開業し、家號を鄕國の名其儘に大和屋と稱す。

祖父　六代目　大和屋定右衛門　本名　塚本定右衛門

細川越中守の浪人で石狩豐吉江戸中浪々して大和屋に厄介になつて居る中、六代目定右衛門と意氣投合して養子となる緣組當日屆出、同日受付

實父　七代目　大和屋定右衛門　本名　塚本定右衛門　前名　豐吉

土岐山城守家來加藤某の生める娘、結婚當日屆出、同日受付

實母　おみよ

人入業元締。住居京橋白魚河岸。

養父　相模屋幸右衛門

幸右衛門と共心同力、その子供敎育に努力し、唯四郎と云ふ男子とお照といふ女子の二人を生み出す。其功デカン章に値す。

養母　おきよ

大和屋の家督を相續し八代目大和屋定衛右門となる。

實兄　松五郎

相模屋の總領なれど、諺の通り頗るの甚六、親父に愛想盡されの廢嫡の憂目を見んとしたれど、政五郎の盡力によりて漸く御難を免かれ家督を相續す。

義兄　唯四郎

妾　お榮

右謄本は冥土娑婆の兩本とを校合して相違なきことを證認す。

戸籍吏　十九代將軍壽川成印

戸籍吏　十八代將軍壽川末也印

右の戸籍謄本を見れば大抵分る事と思はれるが、尙念の爲め、蛇足を加へて置く。時は德川十一代將軍家齊の執世時代、文化の初め芝口二丁目に諸家出入り六尺の人入業通稱大和屋定右衛門本名塚本定右衛門といふのがあつた。夫婦して是非子供が

欲しいと焦つて見たが、運が惡いか神が授け給はぬのか、一人も出來ない。神佛新願は素より、凡らゆる手段方法を盡したが矢張り駄目、そこで自分で生むといふ事を斷念し、一寸した事から家に置いて世話して居る細川家の浪人石狩豐吉が、三杯目にも四杯目五杯目にも窃と出さない處に見込をつけ、養子になつて呉れと相談すると、豐吉も浪人の事であり是非武士にならなければならないと云ふ義理合もない處から二つ返事で承諾し、善は急げで早速養子にしてしまひ、土岐山城守の家臣加藤某の特別教養の娘お美代を嫁に貰ひ家督を讓つた。七代目大和屋定右衛門となつた豐吉夫婦は、二代も續いて養子をするやうでは人間たる資格がないと思つたか何うか知らぬか、奮鬪努力の功空しからず、松五郎と政五郎といふ二人が出來た。兄の松五郎の方は所謂總領の甚六で左程豪くもなかつたが、政五郎の方は兄優り親優り人優りで期待以上の上々出來物であつた。

處が、當時京橋白魚河岸に、人入業の元締で相模屋幸右衛門と云ふのがあり、總

領を唯四郎妹お照と云ふ二人の子があつたが、此の唯四郎も御多分に漏れぬ甚六組で、到底天下を驚かすやうな藝當は出來さうにない處から政五郎に狙ひつけ、定右衛門の處へやつて來て、禿頭の擦剝ける程疊に摺つけ、頓首百拜千拜して政五郎を養子に呉れと嘆願した。定右衛門も夜の目も眠らず一生懸命になり特別念入りに育てた上、出來物の政五郎を人に呉れるのは馬鹿々々しい、骨折甲斐がないと思つたが幸右衛門が鯱鉾立ちしての懇願、それに一旦自分で出來る事なら相談に乘らうと云つたが誤り、大事の〳〵政五郎ヤーイを養子にやる事にした。政五郎其時漸と十三歳。

政五郎は養子となつても、養子根性を出すやうな馬鹿野郎ではなかつた。養父母を實父母同樣に眞心から孝養を盡した。魚心に水心政五郎の方で然う云ふ風であるから養父母の方でも實子同樣に可愛がつたことは無論である。實父定右衛門は三四人の子分が大勢の人足と一緒になつて、老中青山下野守忠裕の登城の際、狼藉を働いた

科により牢にぶち込れたことがある。其時政五郎は毎日金比羅さんに日參して實父の無事出獄を祈つた。其間に雪の日に癪に惱んで居る母子を助けてやつたことがある。其娘は後ち政五郎が俠客を賣出してから妾になつた。此女は人の口車に乘つて姦通し、恩を仇で報ひるやうなことをしたが、政五郎は七面二分も取らず、重ねて四つにもせず、其相手の男と綺麗に正式に夫婦にしてやつた。隨分甞められて居たやうだが、此の太ッ腹の處が政五郎の偉い處で、我樂多人物には一寸出來ない藝當である。實父は十二代將軍家慶の弘化三年三月特赦されて出獄したが、嘉永四年四月遂に死んだ、墳墓は築地本願寺の寺中勝林寺に在る。家督は總領の松五郎が相續した。

政五郎は十八歳になつて家付の娘お照と結婚したが、家督相續は養父母の實子唯四郎に讓り、日本橋樽正町に分家し、後ち箔屋町に移轉し、三男六女合計九人の子供を拵へたナカ〳〵の精力家だ。然し岩谷天狗に比ぶれば到底比較にならぬ。政四

郎はよく喧嘩もしたが喧嘩の仲裁もよつやつた。一時は喧嘩仲裁引受所の觀があつた。

十二代將軍家慶のお側御用人松平筑前守の屋敷へ、人足の件で招ばれて行つたことがある。其時筑前守の若殿の新彌が引見し、酒肴を出して饗應したが、新彌は酒癖が惡くて醉ふと無暗に喧嘩を吹かける、政五郎進められるまゝに好加減に頂戴したが、新彌はモウ一杯〳〵と無限に飲ませうとする。政五郎が何と仰せられても元來不調法だから頂戴出來ません、平に御勘辨に預りたいと辭退すると、新彌は乃公の盃を受けんとは無禮な奴だと、政五郎の額に青啖を吐き掛けた、怒つた位なら我慢も出來るが、俠客の生面々啖壺と同一視されては到底怒らざらんとするも豈得べけんや、大抵のものはら此野郎巫坐戯た眞似を爲やがると忽ち立上つて喧嘩しなければで、腹の虫が納まらないのだが、政五郎はニヤリと笑つて別に怒つた顔もせず、盃を持つてスイと次の間に立ち、襟差でプツリと小指を切り、淋漓たる鮮血を盃に入

れこれを持つて新彌の前へ進み、『只今は御不興を蒙り恐れ入ります、然し此の政五郎は町人ではございますが幇間ではございません、不肖ながら男を賣るを本領とする政五郎が生血を入れました盃、お受けが願ひたい、若し御前が是れをお受けに相成りましたら、此政五郎も醉ひ潰れる迄お盃を頂戴致しませう』と開き直つた。見れば盃には鮮血が滿々と入這つて居る。幾ら新彌が强情でも酒亂でもこれを飲めと云はれては躊躇せざるを得ない、臍向いた儘グウの音も出ない、政五郎はニヤリと笑つて『では御前お暇を頂戴します』とバイと歸つてしまつた。新彌は政五郎に度膽を抜かれて却つて感心し、武士も及ばぬ度膽、町人ながら遊し〳〵、流石は江戸の隨一の男と謳はるゝ俠客だけあると、使を以て出入をして貰ひたいと申込んだが、政五郎はポンと彈ねつけて仕舞つた。再三再四禮を厚して使を寄越されたので政五郎も出入りを承諾し、爾來特別の寵愛を受けたといふ事件がある。酸いも甘みも嚙み分けた俠客に會つては殿樣も蜂の頭もあつたものでない。

明治五年六月、山内容堂公薨去の際政五郎は追腹を切らうとしたが、板垣退助伯に留られて漸く思ひ止つた。それ以來板垣伯からも非常に愛された。明治十九年一月二十日に政五郎は冥土に轉籍し、次男道之助が家督を相續したが道之助は三十二年の夏佛樣になつた。其跡は養子が繼いたが、これは山中政藏といつて當時郵船會社に勤めて居つた。今日尙ピン〳〵して居るが、政五郎の餘光で相政と云へば今日でも相當に羽振が利いて居る。小金井小次郎が三宅島に流された時なども金品を贈つて勢はつてやつたので、政五郎が死んで極樂停車場についた時は第一番に出迎ひに來て居たさうである。

國定忠次

憲政の神樣が忽然として憲政の乞食に早替する文明の今日では、國定忠次の如き義俠に生き正義人道に終始する人物は肺病の妙藥になると云つて鐵の鞋で捜しても

破片も見つかるまい。吾輩はまだ天下を迂路ついて、其麼人物を搜して見たことがないから絶對に無いとは斷言しないが、デモ苦しい世の中にデモクラシーを、神輿の如く擔ぎ廻る飛上り者の多い所から見ても、其麼殊勝な人物は頓と有さうに思へない、假令發見したとて、時世の違つた今日、却つて迷惑でもあらうからまあ〳〵國定忠次の戸籍調べでもやつた方が骨が折れなくて安全第一だらう。

戸籍抄本

原籍地　上野國佐位郡喜妻村大字東國定

現住所　日本の極樂俠客通り六丁目千番地

裝束での職業　俠客

國定忠次

妻　不詳

父　未詳

右抄本は原本と相違なきことを證明す

無限元年十八月七十五日

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王印

國定忠次の國定を苗字と間違てはいけない、戸籍抄本の示す通り國定と云ふ處に生れて俠名を賣つたので世間が國定忠次と云ひ、本人の承諾も得ずとう〳〵忠次の苗字のやうにしてしまつたのである。然し忠次も敢て抗議を持込まなかつた所から見れば默認的事後承諾をやつたものであらう。

忠次親分が俠客として天下に賣り出したのは天保七年に於ける二合八勺の大飢饉である。二合八勺と云ふのは百文についでゞ、今日のやうに外國米の輸入がなかつたのであるから實に慘憺たるものであつた。蚯蚓みたいに泥食つて水飲んだものさへ

少くなかつた。ソリヤ聞えませぬ天道樣と云つて見た所で何うにもならぬ。貧民になると米が食へないから、草の根や、草の葉を食ふ、隨つて顏色青瓢簞のやうになつて腹力がない、立てばフラ〳〵眩暈がする、外出する時は、犬見たいに四ン匍ひに匍つて歩く、米食つてピン〳〵して歩いて居る金滿家などに出會すと、尾緒を振つてワン〳〵お廻りちん〳〵、お預け……ソリヤ嘘だが兎に角近世稀に見る大飢饉で、二合八勺の米が食へず、地獄極樂の戸籍吏閻魔大王の許へ戸籍謄本相添へ、轉籍屆を差上したものも少くなかつた。

此慘狀を見て國定忠次、義心默する能はずで、挺身犧牲となつて救濟策を講じた其鮮かな仁俠的行動は、忽ち評判となりヤンヤの喝采を博した。而も其喝采たるや其處らあたりの一山幾らの尻振り女優が怪しい尻振りダンスを演つて臀の振り加減が乙だなどゝ出齒黨や狼連にヤンヤの喝采を博するのとは、憚ンながら聊か趣が異ふ。

忠次が救濟の皮切りをやつたため桐生、太田、大戸、前橋の富豪連が施米を出して十四郡を賑はした。お蔭で干からびかかつて居た十四郡の人民は、カラ〳〵に干からびずに濟んだ。救はれたる百姓町人は、撫でられた猫のやうに咽喉をゴロ〳〵鳴して喜んだ。

天保年間は餘程旋毛の曲つた神樣が當番に當つて居たものと見えて、氣紛れをやつて人民を困らすこと夥しい。十二年には又どえらい旱魃、天保時代の人間に幾ら拔作が多かつたとは云へ、斯う飢饉、旱魃虐政がチヤンポンにやつて來てはやり切れたものはでない。宛でコレラとペストと世界風とがチヤンポンにやつて來るやうなもので、これでは好加減泣面かゝずには居られない。旱魃で苦しめられたのは群馬、佐位、新田、山田の五郡百三十五箇村、百姓は青くなつて赤くなつて、どす黑くなつて血の血が無くなり、農作物より早く萎びてしまつた。

處で勢田郡鹿澤村に二十二箇村の支配をする代官松田軍兵衛が、廣瀨川の用水を

堰止め自分の支配地域のみに水を入れ、他所は野となれ山となれを極め込んだ。元來此代官碌でもない奴で一人として能く言ふものはなかつた位であるから群馬、佐位新田、山田四郡の百姓は大いに憤り、蔜旗を押立て代官を踏潰すと敦圍さ、鐘、笛、太鼓は勿論、法螺貝ホーカイサ、ホーカイ、ブー〳〵ドン〳〵ジャン〳〵ガラ〳〵、ピー〳〵ポコ〳〵、チンチリツンテン、テレックテン〳〵、ツンツルテン〳〵廣瀬川の堤防へ殺倒し、代官の生命も風前の燈火となつた。此時忠次は代官の爲め不法監禁を食ひ、三年越し牢へ打込まれて居る鹿澤村の居酒屋の父子を救はんとして代官屋敷に乘込み、代官の爲めに管煙で前額を割られても腹の虫を押へ、代官の妻君お花が赦免許可を引受けると言明を與へたのを土産に歸る途中であつたが、子分の注進によつて、代官への談判を引受け代官の屋敷へ引返した。處が代官は妻君お花を相手に將に一杯飲し召さんとして居る所で、忠次が火急の場合取次を待たず無斷で庭先にやつて來たのを先刻額を割られた仇討に來たものと早合點し、長槍を探つて突いてかゝつた。此時忠次の子分で生魚の嚴鐵といふ坊主あがりの暴れ者が横合から飛出し、代官を梨割にしてしまつた。逃げんとするお花も返す刀で袈裟がけにスバリ殺つて仕舞つた。忠次の子分は代官が作つた水門を叩き壞し、各郡平等に灌漑の便を得せしめた。此壯擧によつて國定忠次は百三十五ヶ村の百姓から基督の如く尊敬仰慕された、但しアーメンは云はなかつた。今日のやうにアーメンが流行して居たら、和製基督國定忠次貌下とか何とかの尊稱を奉つたかも知れない。

忠次は代官夫妻を殺し、水門を破壞し破獄をし、酒屋の父子を救ひ出さうとしたが親父の方は牢死し、伜丈けが痩せ衰えて殘つて居た。惡代官を退治て偏頗政治を根絶し、百三十五ヶ村の民を救つたが、代官を殺した罪は免かれない。然し忠次はまだ〳〵安心して死には早いと思つて、鄉里を出奔し諸國を流浪し、嘉永元年國定に舞ひ戻つた處を捕縛され、大戸に於て死刑に處せられた。忠次の死後有志の人々によつて三體の地藏尊が建てらた、俠魂義魄は永久に紀念されることになつた。忠次は俠

客が看板で、博尖は生活上己むを得ずやつたが、博尖で得た金一厘も溜めなかつた。以上は忠次の義俠的行動中の一部分に過ぎない。一々列擧して居ると日が暮れて仕舞から略して置く。

忠次も今では極樂の俠客通り六丁目千番地に一戸を構へ佛樣からの當がい扶持で呑氣に暮して居るが、それでも旱魃や飢饉などの際は、幽靈になつてデモクラシー運動を起さうなどと云つて佛樣を困らせるさうで、先般の米騷動の時なども、モ一度娑婆へ歸して呉れと座り込まれ、如來樣も一寸手古摺らされたさうである。

◎村雨金五郎

戸籍抄本

原籍地　幡州赤穗

寄留地　江戸下谷坂本町

現住所　日本の極樂俠客横丁十二番小路

婆婆での職業　武家出身の俠客

村雨金五郎

前名　勝田金五郎

妻　念佛次郎兵衛の娘　おきぬ

結婚當日届出同日受付

長男　金之助

父　赤穗淺野の家臣　勝田小太夫

兄　同　上　勝田新左衛門

養父　婆婆での職業　俠客　念佛治郎兵衛

右抄本は戸籍の原本と相違する處なし疑ふ者は死んで地獄に落ちるべしものと

心得べし

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王㊞

證人

在冥土　幡州赤穗城主　淺野内匠頭長矩㊞

在冥土　念佛次郎兵衛㊞

右戸籍抄本記載の通り武家出身の俠客ではあるが、お平の長芋然として青瓢簞の化物の如く而も馬鹿でも殿様に頭を下げ、五十石や百石の端た祿を貰つて一つしか無い生命を進呈仕る位なら、寧しろ武士商賣を眞平御免蒙り自由の天地に自由に生き面白可笑く暮した方が、人間らしい氣の利いた遣り方だと、大恩ある主君に尻を捲つて俠客に鞍替へをした太い野郎ではない。

父は淺野家の劍術指南番勝田小太夫、兄は赤穗義士四十七士の一人勝田新左衛門氏も素性も立派な武家に生れながら、町奴となり下り、世の中を七分三分に高を縛り、長い浮世を短かく暮す俠客となるは、些と心得難い話、是れには何か深い仔細が無くては叫はぬ、眞逆女郎とやらを澤山買つた大罰でもあるまいと、冥土の俠客横丁に納まつて居る金五郎君に電報で問合せた處が「シサイシヤベルトコマルヒミツ〳〵イサイフミ」といふ返電。故に折角ながら仔細公開は吾輩が保留して置く。

其書面に依ると仔細あつて幼年の頃乳母に連れられて江戸に下り、乳母の家で育てられて居たが、乳母が病死してからは、下谷坂本の俠客念佛次郎兵衛に引取られて育てられた、育て親の次郎兵衛が俠客であるから、金五郎も其感化を受けて俠客的に育ち、誰に教へられるともなく劍術も並外れの腕前、次郎兵衛の乾兒は兄哥々々と奉る。

次郎兵衛の一人娘おきぬに無茶苦茶に神聖の戀をされ、おきぬが二輪の小烏の音吉といふ破落漢と、播州浪人と稱する矢部三十郎の爲に、落花狼藉の夏目に逢はんと

する危急を救つたを機會に、次郎兵衛に口說かれ、義理上肱鐵を食はせる譯にも行かず、おきぬと夫婦になつた。おきぬは界隈切つての評判娘、有象無象の自稱色男共にワイ〳〵騷がれて居た程の女であり、而も金五郎に茶々無茶に神聖の戀をして居るのであるから、金五郎とて木石でなく摺鉢の破片でないから、滿更嬉しくないことはなかつたことは、死んで冥土で閻魔入王に調べられたとき、手放しで惚けた事實によつて證明される。

幼い時江戸に連れられて來たので、兄新左衛門の顏は知らなかつたが、おきぬを救つた一件で、音吉三十郎等に喧嘩を賣られ、三十餘人を向ふに廻して血の雨を降らした時に偶然、兄新左衛門に出會し、父小太夫が御前試合の遺恨で矢部三左衛門に暗討された事を聞いたが、其矢部三左衛門は小鳥の音吉と同腹になつて、金五郎を敵視して居る矢部三十郎であることが分つた。爾來兄新左衛門と共力して、三十郎を附け狙つて居たが、三十郎は其れと覺つて逐電し、巧みに姿を晦まして居たが、淺野

內匠頭が吉良に刃傷して間もなく、小太夫の仲間で小太夫が三十郎の爲めに暗討された時供をして居て其場から逃走し、江戸に來て音吉三十郎等の手下となつて金五郎を苦しめた五郎藏の改心によつて親の敵三十郎を討取つた。

兄新左衛門は主家變事以來姿を隱して、金五郎の家へパッタリ來なくなつた。丁度元祿十五年五月五日の節句に女房お絹が擔ぎ八百屋に身を寶して居る新左衛門と途中で出會し、無理に坂本の家へ連れて來た。金五郎は主君の仇討を慫慂したが新左衛門は取り合はない、金五郎犬侍と罵り主君に代り父に代つて天誅を加ふと斬つけたが、新左衛門は淺野家でも屈指の劍道の達人、苦もなく金五郎を捻ぢ伏せ『金五郎、俺はまだ死にたくない、生命が惜しい、モウ少し命は乃公に預けて呉れ、濁り江の濁りに魚はひそむともやわ翡翠のとらで止むべき』と云つて八百屋の荷を擔ぎ何所ともなく立去つた。

其年の十二月十四日、降り積む雪を冒して、誠忠無二の四十七士が吉良の屋敷に討

入つて上野の首級を擧げ、主君の宿怨を晴した。明けて十五日、金五郎は其中に兄新左衛門あるを知り、女房おきぬ一子金之助を連れて、永代橋へ急ぎ、引揚げて來る新左衛門に面會したが、其勇壯な姿を見てはモウ胸が塞つて言葉も出ない、只だ熱い涙のみが頰を滝の如く流れた。彼れは『オ、金五郎か、よう來て呉れた、日外は嘸腹が立つたであらうが許して呉れ此の有樣ぢや、然し喜んで呉れ、首尾よく主君のお宿怨は晴した』と云ふ兄の言葉を頭上に浴びつゝ、兄の杖突いた槍の柄にすがりつき、はふり落つる熱涙に千萬無量の思を寵めたのであつた。

此時の印象は金五郎に深い〳〵感銘を與へた、正義は最後の勝利者である、身は町人でも正義の爲めに身命を賭するは男子の本領であり、最大痛快事であるといふ心念を牢固たらしめた。彼れが其後一代の俠客として、墮落した元祿時代の大江戸を濶歩し、村雨金五郎の名を後代に謳はしむるに至つたのは全く此時の感銘にあつた。これは冥土から金五郎君が直接吾輩に寄越した手紙に書いて居る所であるから

牽强附會でも嘘でも法螺でもない。序に言つて置くが村雨と云ふ綽名は村雨の名刀を常に肌身離さず持つて居たからである。テナ事有仰ましたかネ。

◎木津の勘助

戸籍謄本

原籍地　大阪在の木津村　　木津の勘助

現住所　日本の極樂俠客横丁浪花小路　　前名　中村勘助

娑婆での職業　初め武士、次に百姓、次に俠客最後に百姓　　お直

妻　中村勘左衛門

父　新田義貞の系統

序

右磨本は戸籍の原本と相違無し

戸籍吏　塙團右衛門直之　印

おきぬ

血統から云へば南朝の忠臣新田義貞の血統で、何處へ出しても大きな面の出來る立派な血系である。義貞戰死の際、義貞の臣中村勘左衛門、義貞の落胤を抱いて戰場より逃れ、相模國足柄に隱れて養育したが、新田の姓を名乘れば足利の爲めに睨まれて暗殺される憂があつたので、自分の子として中村を名乘らせ、其後代代中村姓を名乘つた。勘助の父勘左衛門は中村を名乘つた義貞の落胤の後胤である、隨つて勘右衛門の子たる勘助は義貞の血の流れを享けた立派な義貞血統のものである。大正の今日では落胤と云つても些とも恥かないが、昔は忠臣や英雄豪傑などの落胤は素晴しく巾の利いたもので、天一坊事件などは落胤なるものゝ權威の如何に

大なるものであつたかを語る好材料である。

勘助の父勘左衛門は勘助を連れて京都へ上り、當時京都に名聲嘖々の譽あつた鞍馬八流の劍客櫻井古賀之助の內門弟とし、勘助を賴み、學問武藝を敎へて貰ひ、勘左衛門夫妻は大阪の木津に居を卜し、百姓となつて生計を繫いだ。勘助は二十一歲にして鞍馬八流の奧義を極め、堂々たる武士となつた。勘左衛門は勘助修業の爲めを思ひ、故意と居所を知らせなかつた。勘助は師古賀之助より免許皆傳の目錄を貰ふ時、始めて、兩親が大阪の木津に居ることを師古賀之助より聞き、父母の安否を見舞ふべく師の許を辭して大阪へ出た、木津へ行つて見ると母は既に世を去り、年老ひた父のみが一人佗びしく暮して居た。後日俠客となつて、世の爲め人の爲め盡す親の人物であるから、親に對してる優しい、せめては父を見送る迄側に居ようと思つたが、大阪は商業地で武藝では飯が食へない、名主に相談すると幸ひ出入の鬼瓦の太左衛門といふ博徒の親分がある、此男綽名は鬼瓦でも、心は義俠心に富んだ立派な

親分、鬼瓦といふのは睨みが利くから附けた綽名である、此親分に相談してやらういふことになり、或日太左衛門が來たのを幸ひ名主が相談すると、それでは私の賭場で蛇の目鮨でも賣つて見たら何うか、何しろ賣歩くのでなし、鮨の箱を並べて座つてやるのであるから、第一氣樂に商賣が出來る、客は自分の子分等であるから現金制に呟付けて懸賣りにさせない鮨屋へも自分が口を利いてやらうといふ、武士の商賣には誂へ向、勘助喜んで蛇の目鮨を受け、鬼瓦の賭場で商賣を始めた。鮨屋と云へば洒落て居るが屋臺も持たず僅か一箱か二箱擔いて行つて賣るのであるから鮨屋と呼ぶのは烏滸がましい程頗る貧弱な鮨屋である。然し鬼瓦が子分一同に腹が減つたら外で飯を食ふべからず必ず勘七さんの酢を食ふこと、但し賭場に來た者は腹が減らうと減るまいと毎日一度は多少に不拘必ず買ふ事と嚴重に云ひ渡した、子分の方でも態々外へ食ひに行く手數が懸らないので願つたり叶つたり、毎日受けた丈けは足りない程に賣れる、元金を引いても老父を養ふ丈けの利益はある。

處が或日新川の新兵衛といふ泥顔役が子分を連れて賭場打ちに來て、勘助の鮨を悉く食つて仕舞ひ、鐚一文も拂はない。催促をすれば『巫坐戯るない此素寒貧め新川の新兵衛を知らねえか、乃公は何處で何を飲食しても鐚一文錢なんぞ拂つたことのねえ天下御免の親分様だ、手前のやうな素寒貧野郎が乃公に鮨を食はれたのは冥加の至りと心得、有り難く御禮を申せ、間抜め』と素晴しい權幕で啖呵を切る。勘助己れ下郎め推參千萬、只だ一打ちとは思つたが、年老ひた母に心配さしてはと胸を擦つて我慢した。鬼瓦は勘助を宥めて新兵衛が食つた鮨の代を自分が拂つた。さうして彼の新兵衛と云ふ奴は大阪切つての惡黨、喧嘩を吹掛けては金品を捲き上げ、因縁をつけては金を絞り、無錢遊興無錢飲食をして良民を苦しめる不逞の徒、だから市民は彼を呼んで泥顔役と云ふ。あんな奴一匹捻り潰すのは此太左衛門でも譯はないが、惡漢でも何でも人一人殺せば自分も相當の刑に問はれなければならぬ、あんな我樂多と生命の交換をするのは馬鹿々々しいから觸らぬ神に祟り無しで相手

にしないのだと話した。義侠心燃るが如き勘助は然う云ふ不逞の徒を生かして置き、觸らぬ神に祟り無しと放任して置くのは、社會の安寧秩序を維持する所以でない、ヨーシ今に乃公が天に代り市民に代つて誅戮してやらうと決心した。

すると其後間もなく老母は老病で床についた。勘助仮を離れず畫夜看護に努めたが、死神の奴め情容赦もなく定命だからと云つて老母を冥土行の急行列車に乗せて連れて行つて仕舞つた。勘助悲惨の涙に暮れたが仕方がない。名主と相談して懇に葬ひ、四十九日過ぎて無沙汰詫び旁京都の櫻井先生を訪問しようと思ひ立ち、名主は勿論鬼瓦にも随分厄介になつて居るので挨拶して行かうと、鬼瓦の家へ行き、挨拶を済して歸らうとすると、例の新兵衛が子分を五六人連れて這入つて來た。そして出會頭に勘助に向つて悪罵を加へた。勘助怒氣心頭に發し、己れ今日こそは眞二つにして呉れようと、向ひの駄菓子屋に新兵衛の出て來るのを待つた。軈て俄かに雨が降つて來た、間もなく新兵衛は出て來た。子分と分れて只一人鬼瓦から借りた傘

をさして行く、勘七傘もさゝず後を尾け、人氣の少ない遊廓橋へさしかゝつた。勘助後方から『ヤイ新兵衛待てッ』と怒鳴つた。新兵衛は振向いて『乃公を呼棄てにする奴は誰だ、大阪中に乃公を呼棄てにする奴は一匹も無え筈だ』と立止つた。勘助近くや『ヤッ手前は鮓賣りぢやねえか』『オー鮓賣りの勘助だ、今日は先日の鮓の代を貰びに來たのだ』『喧しいやい手前のやうな鈍物武士のお下りに鮓代が拂へるかい、取れるものなら取つて見ろい』『オー取らずに置かうか、汝の如き強盗の持つた不淨の金は要らぬ。大阪市民を苦しめる大罪許し難し、天に代り市民に代り中村勘助誅戮してやる、覺悟致せッ』『何を洒落臭い、そんな徹の生へた脅文句に驚くやうな新兵衛様ぢやねえんだ、さア來い』双方抜き合せたが、新兵衛は只だ悪漢で悪度胸があるといふ丈け、剣術では到底勘助の足下にも及ばない。二三合斬り合ふ、中村勘助がエイと、斬下した一刀は見事に新兵衛の横顔を削り落した、アッと怯む處をスパーリと肩から乳の下まで切り下げた。新兵衛は聲も立てず往生した。

勘助は其足で大阪町奉行に自首した。當時の町奉行は有名なる豪傑塙團右新門直之である。勘助を留置いて新兵衛の身元を調べて見ると大阪切つての悪漢、今日迄隨分良民を苦しめて來た奴で、市民は新兵衛が勘助に殺されたと聞いて、赤飯を炊へて祝し提灯行列をやらうと云ふ騒ぎ、其處で塙團右衛門は勘助に對し、

殺殺者新川の新兵衛なる者、其方より鮓の賣懸代金を請求されたるを遺恨に思ひ、汝を殺害せん目的にて途中に待受け、刀物三昧に及び亂暴狼藉を働きたるにより、斬り捨てたる段、正當防衛上已むを得ざる事と認む。因て無罪放免とす、あら〳〵かしこ。

と云ふ破天荒珍無類の判決申渡しをした。勘助は殺し得、新兵衛は殺され損になつた。鬼瓦太左衛門と名主清兵衛は迎ひに來て大いに喜んだ。之れから勘助は良民を苦しめる大阪中の惡漢退治を思ひ立ち、名主から少しばかりの土地を分けて貰ひ、自ら耕して生活する一介の百姓となつた。これは、中村の姓を名乘つて居つては先祖

の名を汚すやうなことがあつては申譯ないといふ武士的精神によつたものである。

嫌て母の一週忌が來た、勘助墓參をして傍を見ると大きな墓があつて淀屋代々之墓としてある。其傍の小さな墓石の上に紫縮緬の袱紗包が置いてある、こゝは墓參りに來た者の遺失品だらうと思ひ、寺男に聞いて見ると大阪屈指の富豪淀屋重兵衛が忘れて行つたものと分つた。中を檢べて見ると實印と三千兩の書付とが這入つて居る。勘助は其足で淀屋重兵衛を訪ね、件の袱紗包を渡した。重兵衛は謝禮として百兩包んで出したが勘助は見向きもせず、『乃公はお禮を貰ひに來たのではない、是れを失くしたら困るだらうと思つたから屆けた迄だ、乃公は其廢事をするのが癪に觸る、一體金持ちと云ふ奴は金さへ出せば何んな事をしても宜いと思つて居やがる、第一他家の墓石の上に物を載せるといふのが間違つて居る、お前の家の墓が大切なやうに誰だつて墓は大事だ、其大切な墓の頭に物を載せると云ふのが了簡違ひだ、墓石は物置ではないぞ、お禮は貰はない代りに是れ丈け云つて置く』と云つて出て

行つて仕舞つた。翌日重兵衛は番頭を連れて木津に勘助を訪問し、厚く礼を述べて娘を貰つて呉れと申込んだ、重兵衛強つての懇望拒絶する譯にも行かず、勘助は重兵衛の娘のお直と云ふ別嬪を細君に貰つた。其時勘助が二十六でお直が十九、大阪中の猥連デレ助黨をして垂涎三千丈たらしめ、中にはお直が勘助の女房になつたと聞いて失望落膽死神様に食付かれ、巖頭の感を書いて華嚴の瀧に飛込んで厭世自殺を遂げ、藤村操に先鞭をつけたものさへあつた。勘助も間接の人殺しをしたのだ、飛んだ色男になつたものだ。

彼の先祖の新田義貞は、勾當内侍の色香に沈汲して尊氏追擊の機を逸し、千載不拭の醜態を演じたが、其血の流れを享けた勘助は妻君の綺麗な顏を拜觀して眤を下げデレ〳〵して一生を終るやうなデレ助ではなかつた。金が要れば背後には大阪で一二を爭ふ大富豪淀屋重兵衛が控へて居る、審判官には奉行堀圍右衛門直之と云ふ酢いも甘いも嚙み分けた豪傑が控へて居る、しざと云ふ時は鞍馬八流の奥義を極めた

無双の腕前がある。而も事業は社會の安寧秩序を維持せんが爲め、良民を苦しめ社會の安寧秩序を破壞する惡漢退治である。死んで地獄に行かないことは請け合の西瓜である。

勘助は惡漢退治に着手し、着々成功した。所奉行堀圍右衛門も配下の役人も勘助が虱か蚤でも捻り潰すやうに大阪中の惡漢を片つ端から退治て呉れるので内心喜こんで、好い社會掃除屋が出て呉れた、其中には大阪も綺麗に掃除が行屆いて安全な都會となるだらう、成るべく勘助に便宜を與へてやれといふ風に蔭に廻つて援助してやる。勘助に取つても萬事都合がよい、惡漢を何人退治ても奉行は正當防衛上已むを得ざる次第と認む因て無罪放免とすと云ふ判決を下して勘助は些しも處刑されない、果ては天下御免の惡漢退治屋になつて仕舞ひ、何んな惡漢も勘助の姿を見ると縮み上つて手も足も出さない、蝸牛が殼の中へ隱れたやうに小さくなつて慄えて居るといふ有樣。木津の勘助といふ名は大阪中に響き渡り、多年の間惡漢無賴の徒

跋扈跳梁し、良民を苦しめ社會の安寧秩序を攪亂し、魑魅魍魎の巣窟たるかの如き觀あらしめた大阪も、數年ならずして勘助の爲めに惡魔退散し、惡漢無賴の徒は全く影を潜めてしまつた。

淀屋重兵衛は娘を嫁づける時、勘助が正廉潔白で持參金を附けると云へば承知しないに相違ないと云ふ處から娘の小使料として內密に三千兩持たせてやつた。娘は夫勘助が惡漢退治に着々成功して居る際、何かの用に使つて下さい、これは私の小使として貰つて來たのですと、三千兩全部出した。勘助は宜し其れでは何か公共事業に使つてやらうと、大阪市中河淡人足請負御用を出願して許下され、本津川を切開いて水利を便にし、上勘助、中勘助、下勘助の三つの島を開拓した。其れが今日の三軒家である。勘助が開拓する迄は一面の葦島で、宛から上代の昔のおのころ島のやうであつたさうである。此三島開拓は大阪の繁榮に多大の貢献を齎したもので、今である毎年七月二十五日大阪名物の天滿天神の祭禮には西區寺島の濱に勘助人形を

飾つて一般公衆に觀覽せしめ、勘助の偉大なる功勞を表彰することになつて居る。

勘助が惡漢退治と荒蕪島開拓の事業に成功して間もなく、飢饉で大阪市民が四苦八苦の苦境に陷り、饑餓路傍に滿つといふ有樣で、慘憺たる光景を呈したことがある。其時勘助は卒先市民救濟に着手し、裸一貫の素裸慨に力士の化粧廻しのやうな物の小さいのを裸の上に纏ひ、先祖傳來の業物を横たへ、多くの子分に車を輓かせて公儀の米倉に押かけ、米倉を破つて米俵をドシ〳〵積出し、市民に大施米をやつた。裸一貫で歩いたと云つたら、五十錢の科料を取られはしなかつたかと思ふ者があるか知れぬが、其頃は裸躰で往來を歩いても科料を取られるやうなことはなかつた。勘助は既に一身を犧牲にして大阪の爲めに盡し、役人も蔭では勘助の人物に敬服し其功勞を德として居たので、役人は勘助が米穀倉庫を破つても見て見ぬ振りをして默つて居た。倉庫の米を悉く積み出して施米が終ると彼れは直ちに奉行所へ自首した。これが他の者なら死刑に處せられるのであるが、勘助であるから奉行は出

來得れば無罪放免にしてやりたかつた。然し苟くも公儀の米倉を破つて倉庫内の米を悉く持ち出したのであるから、假令一般市民救濟の爲めとは云へ、到底無罪放免とする譯には行かない。そこで奉行は公儀の米倉を破つた段不屆の至りと云ふので勘助島へ流罪を申渡した。奉行が勘助を勘助島へ流罪に處したのは、他の遠い處へやれば勘助も困るが自分が開拓した處へ遣れば些とも困らないといふ處から勘助島へ流罪にしたのである。勘助の方でも勘助島へ流されるのは自分の家に居るのも同然で少しも困ることはない。隨分人を喰つた遣り方であるが、流される奴が勘助で流す奴が豪放磊落、世の中を絲瓜の皮とも思つて居ない塙團右衛門と來て居るのであるから、宛で同じ穴の狸が同腹で狂言して居るやうなものである。而して勘助の流罪は約一年ばかりで赦免になつた。赦免後は俠客を廢業して百姓に逆戻り、鋤鍬を肩にして呑氣な生活を送つた。後には大地主となつて疊の上で往生安樂を遂げた。墓は木津の幽泉寺にある。此幽泉寺には勘助が飢饉の時纏つた化粧廻し樣のものと

ねんね、このやうなものとの二品が遺物として保存されてある。

今では極樂の河川改修課長でバリ〳〵して居る。これ込三途の川が氾濫して賽の河原を荒したことが度々あつて、地藏さんも隨分困つて居たが、勘助が河川改修課長となつて以來、鋭意三途の川の河底浚渫を行つたので、其後は一度も氾濫の憂目に逢ふことがないさうで、冥土總裁阿彌陀如來閣下では勘助の功勞を多とし、冥土高等官一等俸給の辭令を交付したさうである。

回金看板の甚五郎

戸籍證明書

原籍地　江戸京橋區丸屋町
現住所　日本の極樂俠客横町錢屋小路
娑婆での職業　人入元締兼俠客　金看板甚五郎

右は戸籍の原本と一分一厘も相違する處無之候。斷じて疑念を挾むべ

からず、火を見たら火事と思へ、人を見たら泥棒と思へ、此戸籍證明書を見たら本當と思へ。

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王㊞

證人　浮世繪師　歌川豐國㊞

金看板甚五郎といふと、何だか巾着切りの金看板のやうに聞ゆれど、なか〳〵以て巾着切りなどの吝な眞似はしない、堂々たる江戸隨一の人入元締で、子分丈げでも千人近くあるといふ大親分樣、家號を錢屋と云ひ通稱を金看板といふ、弱い者は助け、困る者は救つてやるといふ現實の神樣佛樣である。

そんじよそこらにゴロ〳〵轉がつて居る神樣佛樣はお賽錢をあげなければ御利益を授けて呉れない、お賽錢をあげても、ちよつくらちよつと、てきはきと御利益は授て呉れぬ。圖太い神樣佛樣になると先づお賽錢を勘定してからでないと御利益に手

をつけて呉れぬ。何うかすると僅たこれつぱかしのお賽錢をあげて御利益を授けて貰はうなんて虫の好い事を吐すな、貴樣のやうな吝嗇た奴には御利益は授けて遣らない。但し此の御賽錢は乃公が頂戴して置くとも何とも云はず默つてお賽錢を猫婆にして仕舞ふ泥棒のやうな神樣佛樣があるが、此の金看板甚五郎といふ生きた神樣兼佛樣兼俠客は、お賽錢をあげなければ御利益を授けないなどとは云はない、少々どころか大いに旋毛が曲つて居るので、お賽錢を澤山とあげて澤山と御利益を授けて貰はうなどと思つたら大變、即ち大鐵槌のやうな拳骨といふ御利益が横つ面にボカンと來る、場合によつては首と胴とが泣別れとなる。其代り弱い者貧しい者正しい者仁俠の者には何處までも味方となり、保護者となつて覿面に御利益を授ける、無論お賽錢などは鐚一文も要求しない。場合によつては却つてお錢を賜はる、イザとなれば一つしかない生命までも賭して權利義務を主張して呉れる。邪曲强者の爲めに虐められる時は、生はんかな觀音樣や藥師樣にお賽錢を奉納してお百度詣り

をするよりも、此甚五郎親分に無一物で一度云つてお願ひした方が覿面に御利益がある。これこそ御利益の覿面たることは金看板である。

馬方藤五郎、木村五郎藏等と同じ時代に俠名を賣つてヤンヤと云はれた人物、豐國が勇みの三五郎の一人として描いた丈けの價値は十分ある。名代の骨ばかりといふやうな代物でないことは吾輩が保證する。吾輩の保證では信用出來ないと云ふなら、閻魔樣でも阿彌陀樣でも裏書をさせる。これでも信用が出來ないと云ふことはあるまい。

金看板の甚九郎

戸籍抄本

原籍地　江戸京橋丸屋町

現住所　日本の極樂俠客通り九丁目

娑婆での職業　炊出し渡世兼俠客

妻　お政

右抄本は娑婆冥土兩戸籍原本と相違なきこと責任を以て認證す。

地樂極樂の戸籍吏　閻魔大王㊞

戸籍吏江戸北町奉行　曲淵甲斐守㊞

金看板甚九郎

安永年間（後桃園、光格、高倉天皇の御宇で今を距ること約百四十餘年前）大江戸八百八町に鳴り響いた俠客、平生通用の名は金看板甚九郎、略さず叮嚀に云へば、金看板伽羅の兄い紫紐甚九郎、目の短かい時は目が暮れて仕舞いさうな、蜿々長蛇の如き肩書附の名前である。

此素敵滅法に長い混淆しい肩書の所有者たる甚九郎親分が、嘖々たる名聲を得るに至つた動機は頗る變つた珍妙な事件で、普通は大喧嘩をして相手を見事に凹ませ

たとか、奉行や旗本や大名を相手にして喧嘩しれとか、デモクラシー運動の急先鋒となつたとか、大抵相場は定つて居るが、此甚九郎親分ばかりは滅多に人の言ひなりにならない一風變つた藝當をやらかしたのである。

甚九郎が未だ金看板といふ綽號を奉られなかつた一部の小親分に過なかつた頃、甚九郎が夕餉の膳に向つて一杯飲し召さうとして居る所へ突然勝手口から飛び込んだ男がある。甚九郎行つて見ると、四人服を着て體に繩の掛つた一人の男が立つて居る、そればかりならよいが人糞の臭いのが猛烈に鼻を襲ふ。甚九郎が誰乎すると其男は『私は上州木崎在龍神村生れの無宿瓜の仁助と云ふものでございます』といふを冒頭に語り出した所を聞けば、子供の時かち手癖が惡く、乃公の物は乃公の物人の物は公公の物、金でも品物でも見ると無顧借用仕り度くなる、剩けに飲む打つ買ふと云ふ三拍子揃つた遺憾なき不屠者、十四の頃から家を飛出して、三十六の今日迄泥棒強盜數十犯、神出鬼沒的に姿を晦し、巧く捕繩の網を潜り抜けて來たが

遂々捕はれて死罪獄門と決定し、今日大傳馬町の牢へ護送される途中、故意に便所へ足を突込み、濠端で洗ひ乍ら役人の油斷を狙つて逃走して此處まで逃延びて來たと云ふは故郷に老母が居る、長年會はずに居るので、せめて一目なりとも會つた上不孝の罪を詫び、其上で安心して處刑を受けたいからであるといふ。そこで甚九郎が『それでは乃公の家に當分隱匿つて呉しといふのか』と聞くと『イエ隱匿つて頂きたいといふのではございませんが、貴下を男の中の男と見込んで強て御願ひしたい件がございます』と云ふ『して其の頼みといふのは一體何う云ふ事か、乃公に出來る事なら聞いて遣るまいものでもない』といふと『私がこれから晝夜兼行で郷里へ歸り老母に會つて來るまでの間、私の代りに貴下が牢に入つて居て頂きたい。それも長いことではない、十日間丈けでようございます。貴下を男の中の男と見込んで斯う云ふ事をお願するのですから、逃げ隱れして貴下の御迷惑をかけるやうなことは決して致しません。晩蒔なから私は既に改心して居ります。故郷に老母さへな

ければ斯んなことはお願に來ません、神妙に處刑を受けます』と云ふ破天荒の頼みである。甚九郎仁助の顔を見るとホロ〳〵と熱い涙が頰を流れて居る。『では手前は前非を悔ひ改心して處刑を受ける覺悟で居るが故郷のお母に一目會つて來たいといふのだな』『ヘイ左樣でございます』『おやお母に會ふことが出來りや屹度處刑を受けるか』『勿論見ず知らずの親分に斯麼御迷惑をお願ひするんでございますから、親分に嘘を吐いて逃げ隱れは致しません』といふ言葉にも顔にも眞實が現はれて居る。甚九郎は『ヨシ其れでは乃公が手前のお母に會つて來るまで代りに牢へ這入つて居てやる』と引受けてしまつた。そこで甚九郎は仁助の蓬々と延びて居る目代を剃してやり、着物も着更へさせ、股引、脚袢から草鞋から道中差まで支度をして遣り、路銀として五兩を持たせ、十分に酒も飲ませて其夜の中に出立させた。仁助が何故甚九郎に代理入牢の破天荒な頼みをしたかといふに、甚九郎が仁助の代理で牢へ這入つて居て呉れれば追手が廻らない、安心して故郷へ歸ることが出來るからで

ある。惡人ながら巧く考へたものだ。

代理入牢を引請けた甚九郎は、それから直ぐに仁助が脱いで行つた囚人服を持つて奉行所に出頭し、縄抜をして逃亡した仁助の代理入牢に出頭した旨を申立てた。吟味與力大澤藤九郎が一應情を取調べて見ると、甚九郎は仁助とは赤の他人で何の關係もないが男の中の男と見込んで頼まれたので、仁助が郷里の母に會つて歸つて來る迄十日間代理入牢を引受けたのであると云ふ甚九郎の申立、中を聞いて大澤藤九郎も驚いた、引請に事をかいて牢入を引受けるとは隨分變つた奴だと呆れた。若し仁助が此儘歸つて來なければ其方が代りとなつて死罪獄門の處刑を受けなければならぬがそれでもよいかと念を押して見ると、甚九郎は代理入牢する以上は夫れは素より覺悟の前だと答へた。與力の藤九郎は奉行曲淵甲斐守に委細を上申すると其れでは甚九郎の申出通り代理入牢させて置けといふ奉行の言葉。甚九郎は其夜直ちに牢へ入れられた。すると炊出しの甚九郎が身代り入牢をしたといふことが江戸

中の男伊達仲間に知れ、立派な差入物が各親分からドシ〳〵這入つて來る、入牢とは云ひながら、自由が利かないと云ふ迄で食物などは自宅に居るのと尠しも變りはない。其中に七日經つた、八日九日十日と經ち、約束の日限は來たが仁助は影も姿も見せない。然し奉行の方では俠客の甚九郎が代理で入牢して居るので、其儘にして置いた。軈て十三日となり十四日となつた。奉行の方でも何時迄も放棄つて置く譯に行かない。甚九郎を白洲に引出し『さて甚九郎、其方罪人仁助の代理となつて入牢して既に十四日となる、十日間といふことであつたが、四日を過ぎた今日に至るも仁助は歸つて來ない、此上は已むを得ない、其方を仁助の代りとして死罪獄門の處刑に行ふが承知か』と云ふと甚九郎は『愈々仁助が歸つて來なければ私が仁助を信用したのが誤り、素より異存はございません』と答へた。奉行は重ねて『然らば口書爪印をさせるがよいか、一旦口書爪印をした以上は縱ひ仁助が歸つて來ても其方の罪は免かれぬがそれも承知か』と云つて甚九郎の顏色を窺つたが、甚九郎は

『そんなことはお尋ぬ迄もございません、仁助が到底歸らないものとのお見込みがつきましたら今日只今でも死刑にして下されても苦しうございません』と云つてビクともせない。奉行も驚いた。『私が仁助が歸る迄お待ち下さいと云ふのも男らしくございませんから、仁助が最早歸らないものとお見込みがつきましたら今日只今でも御處刑にして下さい、私は仁助の事は全然忘れて仕舞ひ、私が永年惡い事をしたものだと思つて御處刑を受けます』と云つて泰然自若として居る、奉行も甚九郎の豪膽には感心して仕舞つた。然し幾ら感心しても放免にする譯には行かない。愈々甚九郎は口書爪印をするといふ危機一髪に迫つた。すると慌しく驅け込んで來た者がある。見ると其れは仁助であつた。

奉行は平身低頭した仁助を見て『ウム仁助か、能う歸つて參つた、惡人ながら義を守るとは感心である、褒めて遣はす、然し甚九郎と十日間と云ふ約束を致して置きながら何故四日間遲れて歸つた』詰問した。仁助は『洵に申譯ございません、實

は斯う云ふ理由でございます』と云つて、甚九郎の情によつて追手も廻らず無事に郷里に歸りついた。數十年振りで我家へ行つて見ると家は荒廢家となり、一人の老母は二ヶ月前から病みつき、近所の人々の情けによつて辛ふじて生きて居つた、仁助は病床の母の前に手を突き、不孝の罪を謝し、今度捕はれて死刑獄門と決定し、傳馬町の牢獄へ護送される途中、母に一目會つて不孝を詫び、改心して立派に處刑を受ける決心であることを語り、老先短かい母にせめて一日でも安心させたいと思つて役人の隙を見て逃走し、丸屋町の俠客甚九郎に代理入牢を賴んで置いて歸つて來たのであると涙を流して語つた。病に窶れた老母は仁助の手を取りお前が改心して處刑を受ける決心を聞いて安心したと泣いて喜んだが、母は安心して氣が弛んだものと見えて仁助の手を握つた儘死んでしまつた。仁助は名主の所へ飛んで行つて事情を語り、母の葬式を濟し、母への土産として持つて行つた百兩の内二十五兩は石塔料、二十五兩は永代回向料として寺へ納め、殘り五十兩は米にして龍神村一同

に施與をし、人々の勸めによつて初七日まで寺に居つたが、甚九郎親分の事が氣が氣でないから初七日の法事を濟ませるが否や直ちに出發した。それが爲めに十日の約束が四日遲れたのであると始終を申述べた。そこで奉行は下役人に命じて甚九郎の繩を解かせ仁助に繩かけた。甚九郎は『仁助、手前が改心した心の底は能う分つた、お母が死んで落膽したらうが然し善い事をして來た、乃公は手前が約束より四日遲れて歸つて來ても惡くは思はねえ、安心しろ手前が處刑に遭つても三日獄門に曝されたら首は乃公が貰つて乃公の菩提寺に葬つてやる』と云つた。但し冥土へ行つたら閻魔さんに宜しく言つて奥れと云ふ式はなかつた。仁助は泣いて甚九郎の情の言葉を聞いた。

甚九郎は家から迎ひに來た者の持つて來た着物と着更へ、奉行所を出ると、江戸中の親分連が各三十人五十人百人と乾兒を連れて迎ひに來て居る、其他消防組からも大勢迎ひに來て居る。又平生甚九郎の世話になつて居る者、町内は一軒殘らず迎

ひに來て居る。總數雜と三千人、出獄者の出迎もこれ丈けあれば素晴しいものだ、これによつて見ても甚九郎が如何に人氣があつたかゞ知れるが、破天荒の身代り入牢を引請けたといふことが人々の同情を惹いた大原因であつた。甚九郎を取り圍んだ三千人の一隊が、ゾロ〳〵本町通りへ出て二丁目迄來ると、丁度人參五臟圓の元祖す屋清兵衛の家で新調の五臟圓の金看板を、大勢の鳶の者や人足が木遣で景氣をつけ乍ら屋根へ上げて居る所であつたが、此金看板が江戸第一の素晴しい金看板で金銀の短冊が三十六枚附いて紫の紐が飾りに附いて居る。其附近には見物人が黒山のやうに集つて居た。處へ丁度甚九郎が通りかゝつたので、見て居た黒山の人々は『何うだひ甚九郎親分が身代り入牢が濟んで奉行所から歸る處なんだが、此出迎人は大層なもんぢやねえか、甚九郎は豪勢なもんぢやねえか』『ウン甚九郎も豪氣だがあの金看板も素晴しいもんぢやねえかあの紫の紐の綺麗つたらねえなア』『ソウム、豪氣だね、だが甚九郎は豪氣ぢやねえか』『ウム金看板に甚九郎、成程此奴が

豪氣揃ひだ。然し斯う江戸一の金看板を上げる處へ江戸一の甚九郎がやつて來たのは不思議ぢやねえか』『全くだね江戸一の金看板に江戸一の甚九郎、成程此奴ア旨くぶつゝかつたもんだ』と各自に金看板と甚九郎を褒め稱へ、上げるのと通るのとが偶然一時になつたのを何かの因緣でもあるかのやうに不思議がつた。この事が又江戸中の評判になつて、誰がつけるともなく金看板伽羅の兄い紫紐の甚九郎と云ひ或は單に金看板甚九郎といふやうになつてしまつた。甚九郎か通りかゝつて金看板上げに手傳つたといふのでも何でもなく、偶然通り合せたのが、とう〳〵甚九郎の綽號になつてしまつたのである。

甚九郎は白洲で約束した通り仁助の首は、獄門に三日間の晒しが濟んだ後ち貰つて、山谷の菩提寺に懇ろに葬つてやつた。その事件以來甚九郎の俠名は俄然騰貴し、江戸隨一の俠客となつた。六十四の時一旦生れ故郷の信州へ引退し、疊の上で病死した。

冥土へ行つてからは、婆婆に居るとき金看板と綽號をつけられて居たのを幸ひ、俠客通り九丁目に伽羅屋と云ふ屋號で金看板屋を始め、注文殺到といふ大繁昌を極めて居るさうである。序でに斷つて置くが此の金看板甚九郎は歌川豐國が錦繪に描いた勇みの三五郎の一人金看板甚五郎とは全然別人である。

回日本銀次

名が銀次であるから、仕立屋銀次の親父か伯父さんではないかと思ふ輿太が居るかも知れないから、先づ戸籍の證明書を見せましやう。

戸籍證明書

原籍地　越前國鯖江城下

轉籍地　江戸神田三河町

現住所　日本の極樂俠客通り二十八丁目八番地の二十七號

婆婆での職業、よ組の纏持兼俠客

日本銀次

本名　關根銀次郎

幼名　鳥羽辨之助

現職　冥土消防隊第一部長

法名　儀光德翁信士

菩提寺　東京本郷赤門前　喜福寺

實父　越前鯖江城主五萬石守奥附用人　鳥羽辨次郎

養父　婆婆での職業江戸よ組の纏持　關根常吉

右戸籍の原簿と寸分の相違なきを證明す。間違なきことは、水は低きに就き、川の海にそゝぐが如し。

戸籍吏閻魔大王旅行中につき此證明書を下附す

十萬億土地獄極樂總裁　阿彌陀如來印

地獄極樂總裁閣下の證明の通り原産地は越前の鯖江眞鍋下總守奥附用人鳥羽辯次郎といふ田舍武士の倅で幼名辨之助、舶來品でなくて純日本製、而も農工商の上に立つ武士の原料によつて特製された特製品であることは疑なし。元政七年二月八日靈岸島大火の際よ組の纒持關根常吉の後見で母の敵一刀流の劍客柴田勘解由の首をチョン切り、母の幽魂を慰さめた親孝行者。其敵討の時に納めた額が今でも神田明神の額堂に殘つて居る。拜觀したい者は往つて見るべし、拜觀料は鐚一文も取らない、但し神田明神は商店でないから縱覽御隨意の金看板はブラ下げてない。

後ち關根常吉の養子となつて名を銀次郎と改め、養父の跡を繼いでよ組の纒持となり、凡らゆる江戸の大火小火に轉戰し、功勞拔群正に勳一等功一級金鵄勳章に價ひする、而も俠客を兼業とし、惡を懲し不義を攻め、義を見ては天下の將軍も蜂の頭もあつたものでなく、過てば一介布衣の土方人足にも膝を屈して謝罪するに躊躇せず、强を挫き弱を扶け、封建的デモクラシーの急先鋒となり、四千七街八百八町の

大江戸を股間に挾んで萬丈の俠焰を吐く、當に東洋の偉觀たり日本の壯觀たりである。德川十一代將軍家齊、銀次が江戸に在るは、馬鹿でも殿樣の六十餘大名が束になつて膝下に在るよりも賴み甲斐がある、などの減ず口は叩かなかつたが、豪い奴ちや愛い奴ちや武士も及ばぬ天晴の者と、親しく引見して手づから盃を取らせ、日本の稱號を與へた。日本銀次はこれから來たもので、關根銀次郎では何處の軍鷄の骨か知らぬ者があつても、日本銀次と云へば昨夜生れたホヤ〳〵の赤ン坊でも、ハーンあの江戸一番の俠客よ組の親分かと合點したものである。

仁義忠孝は延命長壽の靈藥と誰やらが言つたさうであるが、宜なるかな仁俠を以て使命とした日本銀次は八十二歲の高齡を保ち、明治二十八年八月二十七日迄生きて居た。

何れ其中に巴里の青年會館に於て俠客講演會を開催する筈で、目下在冥土の俠客諸氏に交渉中であるが、それについては總裁阿彌陀如來閣下の裁可を仰ぐ必要があ

るので、期日の程は今から明言は出來ない。然し流産するやうなことはあるまいと思ふ。決定次第新聞紙上に廣告する。但し其時は聽講は無料であるが、電車賃と弊當代は自辨と心得られたい。

◎新藏兄弟

戸籍抄本

原籍地　江戸下谷山崎町（今の萬年町）
現住所　日本の極樂俠客横町拔穴新道
兄　娑婆での職業博奕打の親分兼俠客　武藏屋初五郎
弟　同　同　上武藏屋新藏

右抄本は娑婆冥土兩戸籍原本と相違する處無きを認證す

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王 印

日本銀次と同時代の俠客で、日本銀次よりも早く賣り出した先輩株である。兄が初五郎弟が新藏、兄弟揃つて俠客屋となつたのは餘り例がない。順序から云へば初五郎兄弟と云ふべきであるが、世間では新藏兄弟と云つて初五郎兄弟と云はない、これは弟の新藏の方が兄優りで役者が一枚上であつたからである。

新藏兄弟が居た下谷の山崎町、今日の萬年町で、東京貧民窟の代表地の一に數へられて居る名聲嘖々日本全國に鳴り響いて居るが、日本銀次と肩を並べた新藏兄弟が此細民窟から出たと云ふに至つては萬年町の細民諸君大いに鼻を高うして可なりである。

博奕打の親分と云へば人間の風下にも置けぬ無賴漢のやうに思はれるが、明治大正の博奕打の親分なるものは棒にも箸にも懸らぬ無賴漢で、博奕を打つて警察へ上げられ、監獄へ拋り込まれて監獄の飯を食ひ續す以外、能も取得もない人間の屑であるが、新藏兄弟などは其んな無賴的屑物ではない。博奕打と云つても親分となれば、

自分で賽の目を讀んで博奕はやらない、繩張といふ勢力範圍があつて、寺かすりといふものを取り、其れで生活をして行く、詰り博奕打の上前を刎ねるのである。モ一つ云ひ換へて見れば、繩張内から賭博の税金を徴集して衣食して居るやうなものである。

而かも天下禁制の裏を表の世渡稼業と爲て居ても、弱い者虐めは決してやらぬ。今日の成金富豪のやうに、弱者を虐めて何うだ豪からうと大きな面するやうな客たれた根性は有たぬ、弱い者なら助けてやる、強い者なら挫いてやる、己れが強いからとて弱者泣かせをやるやうな不心得千萬な奴は鱠にして酒の肴にして仕舞ふ。看板に僞り無しで、何處までも義俠の二字を眞向に押立てゝ場合によつては喧嘩の賣買もやる。生命の遣取りもする。投身しようとする奴を發見すれば、ドッコイ待つた可惜一つしかない大切な生命を我から棒に振る不了簡は廢しなせえ、俺は下谷の山崎町にどぐろを卷いてる武藏屋の新藏といふものだ、事情を聞いた其上で、成程死

なゝけりやならねえものなら俺が手傳つて引導渡してあげやせうと、事情を聞いて惚れた女と夫婦になれないのを悲觀しての情死でも、宜、それぢやお前さん達や晴れて夫婦になれたら夫れで文句はねえだらうと、否應の文句なしで夫婦にしてやると云ふ月下氷人の代理も勤める粋な人。それでも出雲の神樣から一度も何故乃公の株を取つたと苦情を持込まれたことがない。主人や親の金を費ひ込み主人や親に合せる顏がないので死ぬといふ奴は例令百兩が千兩でも自分の財布を逆さに振ひ、それでも足りなければ借金しても穴を埋めて助けてやると云ふ博愛家、お釋迦樣は地獄極樂を說くが未だ曾て切齒詰つて借金の穴埋をして呉れたといふ話を聞かぬ。基督は天國を喋々し悔ひ改めよと懺悔やアーメンの押賣をするが、幾ら悔ひ改めてもアーメンを唱へても、心中すると死ぬから止せ、乃公が夫婦にしてやると云つた例がない。して見ると新藏兄弟はお釋迦樣やアーメンよりも、遙かに實際的効能のある有り難い生神樣、生佛樣であるといふ結論に到着する譯である。

兄の初五郎は喧嘩をして數人を殺したので、捕はれて佐渡へ流され、金北山の刑場で病死した。弟の新藏は初五郎と一緒になつて喧嘩し數人を害めたが、初五郎が全責任を背負つて處刑を受けたので助かり、明治の初年まで生きて居たが、疊の上で往生安樂を遂げた。墳墓は淺草砂利場の德恩院にある。死んで地獄へ行きたくない人は新藏兄弟の墓へ行つて親分頼むと一番頼んで見たら何うだ。但し澤山とコンミッションを出さないと御利益があるか何うか疑問だ。それはなせなどと野暮を云ふべからず、地獄の沙汰も金次第と昔から相場が決定つて居るではないか。

◎柳屋お藤

原籍地　戸籍抄本
寄留地　紀伊國和歌山城下
　　江戸淺草今戸町

現住所　日本の極樂淨土町三丁目電車通り
娑婆での職業　匂ひ節楊子商
現職業　兼俠客　料理屋兼旅館　柳屋お藤
父　紀州大納言家臣　里見新太夫
兄　同上　里見新之丞

右抄本は娑婆冥土兩戸籍原本と相違する處なし、夢々疑ひあるべからず、疑ひあらば嚴重に處罰を申付べし。
地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王印

明和安永年間、江戸に頗る妙な變手古な小唄が流行した。
『なんぼ笠森おせんでも銀杏娘にかなやしよまいどうりで南瓜が唐茄子だ』
と云ふのが夫れであるが、何うだ明治ッ子や大正ッ子には頓と見當がつくまい、意味深長といふが珍ぷん漢ぷんと云ふが、恐らく毛唐の寢言に近い不可解的の小唄としか受取れまい。而も此の珍ぷん漢ぷんの小唄を大江戸八百八町の隅々まで流行

させた本尊様が、淺草觀音境内の柳屋といふ楊子店の楊子賣子のお藤といふ女俠客であるに至つては更に一層譯が分らなくならざるを得ない。

右戸籍抄本記載の通りお藤は紀州大納言家の家臣里見新太夫の娘で兄を新之亟と云つた。父が死んでから新之亟が家督を相續したが、此新之亟は武士の家に生れたにも似合はず殺人術稽古が嫌ひ、親世流の謠や小鼓などを研究し、竹刀で人の頭を叩くよりも手先で鼓を叩く方が遙かに上手であつたが、不圖した事より初代中村仲藏といふ役者と懇意になり劇場へもチョイ〳〵足を入れるやうになつた。處が當時役者は河原乞食と稱して人間並に取扱はれて居なかつたので、河原乞食と交際するとは武士の風上にも置けぬ奴とあつて百五十石はお取上げを食つた上に新之亟と妹お藤は呆房拂ひ、封建時代とは云ひながら昔の大名などと云ふものは隨分無茶な事をしたものだ。イザ戰爭となると乃公の馬前に討死せよなどと勝手な都合の好い事を云つて偶ま役者と交際したからと云つて願を捻り上げた上に呆房拂ひを食はすと

は好加減人を食つた亂暴な遣り方である。其れに比べると文明の有り難さ大正の今日では皇室の藩屏たる華族の奥方奥様が公然役者買ひをしても呆房拂ひも食はなければ巡査さんに捕まつてコラ貴婦人が役者と姦通しては違姦ぞアーンとも何とも言はれない。だから新之亟も今度生れる時は貴婦人に生れさして下さいと阿彌陀如來總裁閣下の處へチョイ〳〵押かけて行つて駄々を捏ねて居るさうである。總裁閣下も此んな奴が無暗に殖ては遣り切れないから霞ケ關の政府に抗議を持込めと外交係の佛樣に内命を下したゲナ。

碌を取上られ呆房拂を食つた新之亟は、そんな尻の穴の狹い箆棒大名なら此方の方で眞平だ、何卒居て下さいと鯱鉾立ちして頼んでも居るものか、此方の方で呆房拂ひを食はしてやらア、何だ洒落臭せえノッペラボーの大根大名め、と啖呵を切つたか何うかは分らないが、妹のお藤を連れて和歌山城に赤ンべい、東海道を迂路ついて江戸へ流れ込み、淺草今戸町に小さな家を借りて落着いた。これが所謂神聖な

る慾の決算をしようといふので手に手を取つて駈落と洒落のめしたのなら色氣もあるが、呆房拂を食つてフラ〳〵と流れ込んで來たのだから氣の利かないこと夥しい。

然うなれば幾ら米價が暴騰しなくても働かなければ乾物になる。新之亟は旗本大名等の屋敷へ出入して謠や小鼓を敎へ、何程かの報酬を得て生活を立てたが、せち辛い世の中、到底其廢事では生活難の貧乏神を擊退することは出來ない。兄思ひのお藤は淺草觀音境内の柳屋といふ楊子店の賣子に雇はれて生活費を補助することにした。處が狸の出るやうな和歌山から這出して來た田舍娘とは云ひながら、西洋の美の神樣まで手傳つて極念入に製造したものと見へて素晴しい美しさ、忽ち柳屋の美人お藤の名が江戸中に響き渡つた。地廻りの堂ずり連は勿論、美人と聞けば腰辨で日參しアハよくば食ひ殺さうといふ狼連が一生一代のお飾しでワッショイ〳〵觀音樣參詣を口實に押寄せる、來る電車も〳〵滿員立錐の餘地無しで、吊革にブラ下つて押潰されさうになつた自稱色男が少くなかつた。中には大勢に揉まれて卒倒する者が出來て、赤十字社からは當門附近に臨時救護所を設け、江戸中の警察は非番巡査を召集して必死になつて警戒し、軍隊まで應援に出動するといふ、古今未曾有の大景氣、觀音樣參詣とは云ふものゝ何奴も此奴も敵本主義の奴等ばかりであるから、觀音樣への參詣はホンの形式、悉く柳屋の店頭に集中してお藤の美しい顏を拜まふと眼の色を變へ喧嘩腰になつて犇めき合ふ、お蔭で楊子が賣れるわ〳〵、瞬く間に賣切れて仕舞ふ。中には『オイ多忙しいのに仕事を休んで態々北海道から遣つて來たんだ、楊子が賣切れになつたらせめてお藤樣の鼻拭いた紙でも受けさして呉れ』『そんな物を何うなさるンですか？』『分つてらイベラボーめ、守護符にして孫子の代まで寶物にするんだ』などと云ふ者もあれば、押潰されるやうな目に逢つて漸くお藤の顏を拜觀し得たが、餘りの美しさに氣が變になるものもあり、或は是れ丈けの競爭者があつては到底我々までお鉢分は廻るまい、生きて失戀に泣かんより

大なる悲觀は大なる樂觀に一致せん、ホーレーショーの哲學も何等のオーソリチーに値するものぞと、方向を轉じて淺間の噴火口や華嚴の瀧に飛込む氣早の連中も少くなかつた。打てば響くで、此評判は忽ち日本の極樂は勿論、印度や支那の極樂、海の底の龍宮から。西洋の天國にまで響き渡り、シーザーやアントニーを骨抜にしたクレヲパトラや、世界無双の好色漢で、鼻下長たる秦の始皇をグニャ〳〵の呆房たらしめて千載に艶々たる醜名を遺さしめたる三國論外の楊貴妃や、當時の狠黨の旗頭深草の少將をしてお百度を踏ませながらとう〳〵御利益を授けず雪中に凍死せしめてしまつた小野の小町姐さんは素より、照手の姫や匂當内侍、小督の局や袈裟御前、さては情夫の義經と吉野山くんだりまでデレついた上に狒々親爺の頼朝將軍の面前で手放に惚けを言つた靜御前などの錚々たる處を先頭に、お玉杓子の如く、呆房宮にウヨ〳〵して始皇を腎虚させた三千の美姫から印度アラビヤ埃及あたりの黒色赫々たる美人連、續いて西洋各國に咲き誇り、競ひ鳴らした一流天切最上特

製のビューチフルは云はずもがな、天に在す美の女神、龍王といふ亭主があるにも拘はらず、浦島太郎を男妾にして、五百年餘りも弄み、煙の遣入つた玉手箱一つで呆房拂ひにした精力絶倫の名古今に隱れなき龍宮の乙姫、近い處では不忍池の辨天樣まで數萬の美の塊りが、必死の盛裝を凝して競爭にやつて來たが、お藤を一目見るやアッと驚いて跣で逃げ出し、世界開闢以來の大椿事を惹起したといふのであるから、其別嬪さ加減が大概想像がつくだらう。大正の今日では若い女が鐵道往生したり投身して土左衛門になつたりすると、何んな醜面ヒョットコでも忽ち無類の美人大切の別嬪にされて仕舞ふ不思議な世の中であるから、或はこれも眉唾物かは知れないが、浮世繪の大家鈴木春信先生が此お藤を筆頭に笠森のお仙と葛屋といふ茶屋の娘のお芳との三人を三枚續きの錦繪に描いて賣り出し、素晴しい評判を取つた處から見ても、なんぼ笠森お仙でも銀杏娘には敵ふまいといふ小唄が、大江戸中に唄はれたのを研究の參考にしても、一見ボーッとする位の別嬪であつたことは否定

すべからざる事實らしい。お藤の事を銀杏娘と云つたのは、お藤が居た柳屋が觀音堂の右手の大銀杏の下にあつたからである。其銀杏は今でも戀しくば尋ね來て見よと云つたやうな風に亭々として天に聳え、觀音堂と春比べをして居る。

明和五年三月二十日、櫻の花の眞盛り、數萬の老若男女が右往左往し觀音の境内で、日本橋本石町二丁目紙問屋桔梗屋利兵衛の娘が、惡漢の爲めに難題を吹掛けられ、既に裸體に剝かれんとするを見飛込み、惡漢二人を手玉に取つて懲したのを皮切りに、弱きを助け强きを挫き、正義人道の前には天下の旗本も大名も眼中にない、將軍も蜂の頭もあつたものでない、見當り次第手玉に取つて懲戒を加へる。抵抗する奴は首捻ぢ切つて頭からバリ〳〵鹽をつけて食つて仕舞ふ。それは嘘だ。

兄の新之亟は姫御前のあられもない腕立ては女らしくないから塡めと警めたが、お藤はハイ〳〵とは云つても不正不義を見、人の難儀を見ては靜として居れない、持つて生れた義俠心は遣れ〳〵と盛んに嗾しかける。我知らず現場に飛出して辛辣

なる腕を揮ふ。これが又忽ち大評判になつて、女俠客柳屋お藤と謳はれるやうになつた。櫻庭鄕太夫といふ猟々旗本がお藤にあまり神聖でない戀をしかけ、新之亟に五十兩の金を貸して恩を着せ、義理にからませてお藤を女房に呉れと申込んで見たが、浪人しても武士は武士、浪花節や鰹節とは譯が違ふ、手前の妹は賣品ではござらぬとポンと跳ねつけてしまつた。鄕太夫はそれにも懲りず暴力を以てお藤を掻浚はふと目論見、お藤が桔梗屋からの歸途を要じて浚つて行かうとしたが、お藤は、『何を此の凸凹野郎め、巫坐戯た眞似をしやがると斯うして遣るぞ』と拳骨で一擲りに擲り倒して置いて首筋をムンヅと摑み、エイと一聲投げ飛ばした、すると鄕太夫の體はブーンと唸りを生じて飛んで行き、翌日の夕方房州沖に落ちたと云ふ。これは些と話が大き過ぎるが、力があつて劍術柔術祥を拔いて居るので、旗本などが五人十人束になつて懸つても手も足も出ない、逆襲を食つて小つ酷い目に逢はされるが落であつた。

お藤が俠名を賣出して間もなく、これが紀州の舊主たる大納言の耳に這入り、歸參を許されて新之亟は前同樣百五十石の祿を與へられた。お藤は目下日本の極樂淨土町三丁目の電車通りに柳屋といふ堂々たる料理店兼旅館を營み、平生は帳場格子に坐つて柳屋の女將さんで納まつて居るが、何か事件が起ると忽ち飛出して仲裁もする。場合によつては喧嘩も引受ける、懲戒して改心しない奴は冥土總裁に上申して極樂を阿房拂ひにして仕舞ふと云ふ鹽梅に、大いに俠腕を揮つて居るといふことである。とは最近冥土を旅行して來た人の士産話。

回野狐三次

戸籍抄本

原籍地　江戸日本橋區横山町三丁目

現住所　日本の極樂俠客横町三丁目三番地

娑婆での職業　大工兼に組の大兄哥兼俠客業　野狐三次

大阪島の内清水町の大家鹽屋九兵衛の一人娘鹽谷小町生辨天等の名浪華三郷に響き渡つた素晴しいビューチフル、三次にラブして遂に野狐三次夫人となる。結婚當日届出同日受付。

妻　大工の磯五郎

養父　お糸

養母　おつね

右抄本は戸籍の原本と相違なく厘毛も疑値無きものなり、喝！。

無限元年三十三月三十三日

地獄極樂の戸籍吏監督　閻魔大王㊞

文化文政の頃、江戸で男を賣りヤンヤの大喝采を博した花も實もある人物。野狐三次の名、聊か奇抜、一寸見れば人間と狐の合の子の如であるが、野狐の腹から生

れたのではない、さりとて野狐の様な顔をして居るといふ意味でもない。此野狐の綽名に就ては理由因縁古事來歴がある。三次の養父磯五郎には子がなかつた。誠心誠意黽勉に黽勉を以てし、努力に努力を以てし信心服薬すと雖も何の因果か頓と女房おつねの腹に天降りがない。そこで夫婦は淺草の觀音様に三七二十一日の祈願を籠め、何卒上等舶來の子供を一人授け給へ産まさせ給へアーメンと注文をつけた。處が滿願の夜賽錢箱の上に唐草模様の蒲團に包んだ生れ立てのホヤホヤの赤ン坊が捨てゝあつた。而も其れが男兒であつたので、夫婦は觀音様の授け給ひしものと喜び、拾つて育てた。其れが即ち三次であるが、捨てゝあつた時着せてあつた初着が薄に野狐三匹をあしらつた模様であつたので、三次が成長の後身體に野狐の文身をした。野狐といふ綽名の由來は斯くの如しで、是れは吾輩が冥土に居る三次に直接問合せたことであるから間違はない。

職業は大工が本職、兼業としては消防に俠客、後には本職の方が兼業のやうにな

り、兼業の方が本職のやうになつてしまつた。文化文政の頃野狐三次と云へば、花のお江戸は勿論京阪地方迄響き渡つた俠客の親分様。但し本職が大工で兼業が消防であるから博奕は打たなかつた。

妻君のお糸は戸籍抄本記載の通り、大阪島の内清水町の大家鹽谷九兵衛の箱入一粒娘、而も鹽谷小町生辨天などの美的尊稱を奉られ、デレ助贅六共をして垂涎三千丈、現他愛もなからしめた程の無類飛切最極上等の特製ビューチフルであつたが三次の勇肌にゾッコンほの字にれの字、所謂神聖とやらの戀をして仕舞つた、之れは三次が大阪へ行つた時の事である。と云ふと三次はお糸さんに神聖な戀されに江戸から態々大阪三界までのたくつて行つたものゝやうに聞えるが、三次は何も生辨天の神聖なる戀を頂戴仕るべく罷り越したのではない。養父の磯五郎が大阪へ行つた儘行衛不明になつて居たので、其れを捜索する爲めに行つたのである。東海道を大阪へ上る途中、大井川の渡場で渡場の無頼漢の爲めに袋叩きに逢はんとする尾

上菊五郎の難を救つたが縁となり、招待を受けて菊五郎一座の演の道頓堀中の芝居を見物に行つた。其時の呼物が菊五郎の扮する大工の六三、舞臺で鉋削りをする場があつて、其時削つた鉋屑を六三根掛けと稱して若い女連が欲しがり、舞臺から投げるのを喧嘩面になつて拾つたものである。處が其一幕が終つて、菊五郎の弟子が一枚の鉋屑を持つて三次の棧敷へ挨拶に來た。三次は其鉋屑を見　注意すべき點を敎へてやつたが、向ふの棧敷に來て居たのがお糸に乳母、六三の削つた鉋屑を拾ひ損ねて泣面をかいてむつかり在し乳母を手古摺らせること大抵でない、依て乳母は三次の處へやつて來て事の次第を述べ御手許にある一枚の鉋屑を是非戴かして貰ひたいと懇望に及んだ。三次は高が鉋屑であるからさア〳〵お持ちなさいと與れてやつた。乳母から鉋屑を受取つたお糸は嬉しさうにニッコリして三次の方を見た。三次は鉋屑を拾へなかつたと云つておむつがり遊ばすやうなべラボーなお孃樣は何奴かと見て居た場合であつたから、視線と視線は瞹と衝突し、お糸の方ではまア何と

いふ勇肌な好いたらしい男だらう、妾すつかり戀しちやつたわと口には言はぬが心の中、三次の方でもオヤ〳〵素晴しいビューチフルだ、西洋のクレオパトラも揚貴妃も跳だと思つた。其後三次は寄食して居る中橋鰻谷の大工棟梁尾張屋瀧藏の代理で、瀧藏出入先の鹽谷九兵衛の茶の間の普請に行つた。三次は此家の娘が生辨天のお糸であり、曾て中の芝居で鉋屑を拾ひ損ねてむつがつたお孃樣であつて、而も自分に神聖な戀をして居ようとは夢にも知らなかつたが、一日若い者が生辨天だ小町だとワイ〳〵騷いて居るので何の事かとヒョイと振返つて見ると、豈計らんや鉋屑を拾ひ損ねておむつがり遊ばし給ふたお孃樣、オヤ〳〵此家の娘か、三次の方は何とも思つてないから至極あつさりして居るが、お糸の方はキューピットに惡戯されて神聖な戀熱に冒されて居るので、アヲーと顏に時ならぬ紅葉を散して引込んだ。其れ以來可哀やお糸はんは遂にお醫者樣でも草津の湯でも治らぬ戀の病とやらいふエンサイクロペヂヤにも醫學辭典にも頓と見當らない甚だ穩かならぬ風俗壞亂的

病に罹り、三次命夫人となること能はずんば、寧ろ輒轢往生仕らんず形勢となつたので、兩親も娘可愛や別れの辛さ、せめて輒轢往生ララせぬうちにと瀧藏に賴んで結婚を申込んで來た。三次も初めは何の彼のと文句を並べて見たが、自分が首を横に振り通せば生辨天の生命が無くなると聞き、大いに仁俠の精神を發揮して遂にはエース、オーライ。其頃までは日比谷大神宮で結婚式をやることは流行つて居なかつたので、鹽谷の家で目出度華燭の典を擧げた。其後間もなく三次は糸子命夫人同伴で江戸に歸り、親分上州屋秀五郎の跡目を繼いで二代目上州屋秀五郎となつた。三代目上州屋秀五郎は野狐三次とお糸命夫人との間に出來た子である。

目下冥土で上州屋といふ圍子屋を開業し、三次が作つて妻君のお糸はんが店に座つて賣人、息子は毎日賽の河原の賽錢の掛茶屋に出張し、子供相手に圍子を賣つて居るが、野狐圍子と云つて名聲嘖々、大人にも子供にも喜ばれ、朝のうちに行かないと賣切れになつて出日は買へないといふ大繁昌をして居るやうである。

回業平善三

戸籍抄本

原籍地　石見國濱田松平周防守城下

現住所　日本の極樂業平横町伊達小路五百番地

江川善三郎事　業平善三

妻　小町のお金

父　江川善右衛門

松平周防守家來馬廻り役

右抄本は戸籍の原本と相違なきこと確實也。

無限元年十六月人の噂も七十五日

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王代理

武士商賣を自由廢業して俠客に鞍替した唐變木。石州濱田六萬石松平周防守家來

馬廻り役江川善右衛門の倅、學問も相當にあり武藝も一人前以上に出來るが、天狗を極め込んで鞍馬山の本場に申譯のないやうな事を敢てする男でない。其れに此男素敵な別嬪で家來一同から業平と云ふ綽名を奉られて居た。男に別嬪といふのは聊か脱線して居るやうだが變節改論や脱線の流行する現代であるから、男の別嬪といふ新熟語を使用しても拘留に處せられる心配はあるまい。本名は江川善三郎と云ふのであるが、業平といふ綽名をつけられて以來業平善三と略式に呼ぶのが通例となつた。殊に俠客に轉業して以來は業平善三でなければ通用しなかつた。

江戸勤番の際江戸見物に出懸け、兩國の掛茶屋で不圖した事から一言二言言葉を交し、一緒に中食をしたのが縁となり、女役者で小町の小金と謳はれた、特別上等頗る付の美人　神聖にじて而も猛烈なる戀をされ、妻にして岡燒連に涎を垂らさしたといふ果報者であつた。

江戸勤番中、用あつて國表に歸る途中、仲仙道上松宿に泊り、祭禮中の八幡樣に

參詣し、ブラ〳〵見物して居る中にトツブリと日が暮れた。折から八幡神社裏手の森林よりアレー助けてーといふ叫喚幽かなれども女の聲、ハテ心得ぬ鼠賊の輩が女を捕へて怪かる振舞に及ばんとするのであらうと、聲を頼りに駈付て見ると眞暗で確と分らないが、五六人の破落漢が一人の女を捕へて何うかして居るらしい。善三郎鐵拳を振つて破落漢を追拂ひ、婦人を連れて行かうとすると三十人許りで逆襲して來た。殺すは無益の殺生擲り飛して追拂はんと、拳骨を振廻して鬪つたが多勢に無勢遂に雁字絡に縛り上げられ、女と共に附近の物置小屋の中に拘留された。處へ上松在岩岡村の親分藤左衛門がやつて來て、二人を縛した子分を戒め、二人の縛を解いて善三郎に謝罪し、乾兒に次第を聞いて見ると女は同地に興行中の女役者の座頭で、暴行の張本人は藤左衛門の乾兒作兵衛といふ奴、女役者に惚れて無理往生に女房になれと脅迫したが、女は役者こそして居れ、自分には立派な夫があるからと拒絶した結果こんな事になつたものであることが分つた。そこで藤左衛門は乾兒の不

都合を詫び、其夫の名を聞いて見ると石州松平周防守家來江川善三郎が夫れで、二世も三世もと契り交した仲だと云ふ。驚いたのは傍に居る善三郎で、自分は獨身であり、未だ曾て如何なる女とも夫婦約束をしたことがない、そこで善三郎が、石州松平周防守の家來の江川善三郎といふのは自分であるが獨身者で妻はない又夫婦約束をした女もないと云ふと、女は突然善三郎に抱つき、さア善三郎樣でございましたか、妾は小金でございますと泣いて喜ぶ。善三郎眞逆兩國で一緒に晝飯を食つた女だといふことは氣がつかないので、何が何だか薩張譯が分らぬ。宛で狐につまゝれたやう。イヤ小金か十四金か知らぬが、兎に角戯談にも夫婦約束をした覺えはないと云ふと、女は其お言葉は無理ならねど、實はこれ〳〵と兩國の晝食一件以來、自分の良人とするは貴郎より外にはないと決心し、御歸國と聞いて興行に事よせこれ迄慕つて來たのであるといふ涎の垂れさうな話、お安くないこと實に夥しい。聞かされる藤左衛門以下の者こそ好い面の皮である。

合縁奇縁とは宜なる哉で、藤左衛門が媒酌人となり、四海波自出度く諾ひ納めて小金は善三郎の妻となつたが、善三郎も女に惚れられて嬉しくないやうな石部金吉でもないが困つたことには、眞逆女役者を女房にしたと云つて故郷に速れては行けない、と云つて女房可愛や別れの辛さ、置いて行く譯にも行かぬ。往こか參らんしよか石見の濱田、往くに往かれず女房が役者、一時思案に暮れたが、元來主用を帶びて歸國の途中女役者と華燭の盞典を擧げる程の呑氣千萬な男、まゝよ三度笠横つちよに被れ、四角張つた武士業より寧ろ博奕打となり俠客專門に河岸を替へ、太く長く面白可笑浮世を渡らうと決心し、上松に腰を据え、博奕打に宗旨變をしてしまつた。由來太く短くといふことはあるが、太く長くと云ふのは何處までも脱線して居る。

斯くて俠客屋を開業し、天下の禁制の裏を行つて博奕は打つが、仁俠の爲めには粉骨を辭せず碎身を躊躇しない。元來が武士出身の男であるから、其俠客振りも普通

の俠客とは何處までも毛色が變つて居た。數年ならずして藤左藤門の岩間村の賭場を讓受け、仲仙道隨一の親分となり俠名雷の如くゴロ〳〵轟いた。

◎江戸屋虎五郎

戸籍說明書

原産地　武藏國足立郡蕨在の岡村
本籍地　上野國邑樂郡館林
現住所　日本の極樂江戸町二丁目
娑婆での職業　表看板俠客裏看板博奕打の親分　百姓東七の倅　江戸屋虎五郎　幼名七五郎

右娑婆冥土兩戸籍原本と相違なきを證明す。

地獄極樂總裁　阿彌陀如來印

地獄極樂總裁阿彌陀如來樣の戸籍證明書に明記されてある通り、武藏國足立郡蕨在岡村の產、百姓源七といふものゝ倅であるが、絲瓜の蔓に西瓜が成つたと云ふが、子供の頃から些とも蚯蚓切りの子らしくない、博奕が好きで一寸目を放すと賭場に行つて見學に餘念ない、博奕の見學に餘念ないなどは餘り感心したものではないが本人の七五郎は衆人濟度の佛術の見學でもして居るやうな氣であつたらしい。

加之、此男力が强くて相撲が好き男達が好き、早くも十三四才の頃から草相撲の群に投じて近國を渡り歩いたが、大關だ關脇だと云ふ大兵がコロ〳〵投られる、殆んど無敵の有樣であつた。

十五の時は茶屋遊びもする、女も買ふ、酒は湯呑で呷つて一升よし二升よし、一寸ホロリとするには三升飲まなければならぬといふ蟒のやうな大酒豪、剩けに大膽不敵でイザとなれば萬人千人の敵を受けても怯ともしない、雁首が飛ばうが手足を切られようが一歩も退かぬ、靑龍刀のやうな大刀を閃めかしても眉一つ動かさぬ、

鼻の先へ突つけてもせゝら笑つて鼻歌で居るといふ剛者、義の爲めには劍の山でも登る、俠の爲めにはお代りのない生命を棒に振つても驀進する、意氣に感ずれば自分で自分の眼玉を抉り拔いて突出す代りに、不義不正の徒を見たら雁首を叩き落して膾にして食はなければ虫が納らないといふ、武士と俠客と博奕打と佛樣と神樣をコンデンスしたやうな稀代の代物で、前垂れ掛けの商人や、鋤鍬擔いで糞を搦む百姓には桁外れ、棒にも箸にも掛つたものでない。

其豪い所を見込んで弟子にしたのが川越在飯能の草相撲の大關で大前田英五郎の弟分となつて居る菱ケ嶽重五郎である。菱ケ嶽重五郎は相撲取りとは云ふものゝ田舍相撲の大關であるから相撲專門では食つて行けない、と云つて水稼業の相撲などに眞面目な堅氣の商賣の出來やう道理はないのであるから、大前田英五郎の弟分となり博奕打の親分となつて相當に巾を利かして居た。七五郎に取つては相撲の稽古も出來る、博奕の稽古も出來る、俠客學の勉強も出來るので持つて來いの修養

所である。

父の源七も七五郎が十五や十六の子供の癖に、飲む打つ買ふ三拍子揃つた上に相撲は好き喧嘩はする、金錢などは木の葉か石塊程にも思つて居ない。意見をしても糠に釘、蛙の面に小便よりもまだ甚い洒々面と云ふ完全無缺の道樂者で、ホト〳〵愛想を盡かして居た矢先であるから、結局厄介拂ひをした氣で、七五郎が菱ケ嶽の弟子となつて行くと云ふのを、二つ返事で贊成した。人間も斯う云ふ完全無缺で愛想を盡かさたるなどは餘り有り難くない、到底勳章は貰へない。

菱ケ嶽の家にゴロ〳〵して居るうちに、博奕打の方でも免許皆傳の腕前、劍術も相當に腕が出來た、俠客學は菱ケ嶽の兄哥分の大前田英五郎から敎授を受け、漸次男を賣り出して江戸屋虎五郎と改名し、關東七人男の一人に數へられ、英五郎の死後は大前田一家の總司となり、大いに善根を施し、弱者の味方となつて天下の大道を悠々濶歩し、强食・弱肉の裏を行つて、强者不義不正漢の鼻ッ柱を叩折り雁首をチヨ

ン斬り向脛を掻拂ひ、咽喉を締め上げてギュー〳〵云はせること無數。但し乃公出ですんは蒼生を如何せんなどの減ず口は叩かなかつた。

◎井筒屋小糸

戸籍謄本

原籍地	わたしや備前の岡山生れ
寄留地	大阪天滿の裏河岸
現住所	日本の極樂新市街地八丁目
職業	婆婆での華魁より圍女となり茶の湯の師匠兼俠客となる。
實父	井筒屋小糸
養父	本名澤井のぶ 澤井主膳
	藥屋 袴屋長左衛門

右確實也。

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王印

今の娼妓や藝者は弗旦を丸め込、鼻下長の鼻毛を讀んで金を絞る以外意氣もなければ張もない、鼻聲を出して膝をグリ〳〵、甘つたるい白でれつ〳〵以外、何等の熱情もなく、所謂醜業婦の名に背かぬ手合ばかりであるが、丁髷時代の華魁や藝者には意氣と張で立て通し、客席に待つて遊興は添へても金錢づくで貞操は賣り申さぬと氣焰萬丈、女に惚い阿房大名や馬鹿大盡を煙に卷き、義俠の爲めには地獄の釜の底でも飛込むと云ふ俠骨稜々義魂沸々たる女が少くなかつた。井筒屋小糸の如き其好標本で、花顏柳腰風にも堪へなん風情でありながら、寶曆年間、約百七十年前九代將軍家重時代浪華隨一の女俠客と謳はれ、浪華ッ兒自慢の一つとなつた女である。

井筒屋小糸は米の成る木はわしや知らぬ、俗謠の本家本元備前の岡山生れ、池田の家來澤井主膳の愛娘本名お信。主君から願つた茄子の茶入を紛失して父主膳は切腹、家改易となり孤兒となつたお信はまだ十四の小娘であつたが流石は武士の娘、

紛失の茶入を捜し出して父の靈を慰めたいと、住み馴れた岡山城下を後に見て、何處を目的と定めなく旅の人となつた。身は浮草の漂々と諸所を徘徊ひ、堺の大和橋まで辿りつくと急に氣分が惡くなつて路傍に倒れた。其處へ通りかゝつたのは堺の藥屋長左衛門夫婦で、子供が無いので住吉神社に三七日の祈願をこめ其日が丁度滿參の歸り途であつた。藥屋であるから病人の手當は手前もの、應急の藥を與へ背負つて我家に連れ歸つた。病氣も二三日で全癒つた。容子を聞けば譯あつて兩親の名は言へぬが天にも地にも身寄りのない孤兒であると語つた。では幸ひ我々夫婦に子がなくて住吉神社に子寶の天降りを請求して居た處であるから養女になつては呉れまいかと相談すると、只だ風來坊のお信で承知なら養女になりませうと云ふ。此處で相談が纏つてお信は長左衛門の養女となつた。

處が不幸にしてお信が十六の時類燒で長左衛門の家は丸燒、箸一本殘らない迄に綺麗さつぱりと燒いてしまつた。さうして他から預つた五百圓をどさくさ紛れに店員に持逃げされてしまつた。爲めに長左衛門は女房とお信を連れ大阪に出て小商を始めたが、預つた五百圓を催促され返さなければ、生命を取るといふ扳差ならぬ强硬な談判、お信は見るに見かねて自ら新町の井筒屋に身を賣り五百圓を償却した。其中に女房が死んで長左衛門も眼病に罹つた。

お信は天滿橋の裏河岸に長左衛門を住はせ、充分の仕送りをして眼の治療をさせた。孝女の赤心天に通じてか長左衛門の眼病は間もなく癒つた。これ迄はホンの序幕で手紙にすれば拜啓陳ばである。

女俠客などは絶世の美人とか三國論外の別嬪とか大抵相場が定つて居るが、お信も其方式通り絶世の美人であり三國論外の別嬪であつた。源氏名を小糸と名乘つて出たが、午旁の白和へのやうなデモ華魁より拜んだことのない贅六どもは呀とばかり驚いてしまつた。井筒屋の小糸は生辨天だ、絶世のビューチフル、三國論外の別嬪だと云ふ評判は忽ち廣い浪華の隅から隅まで響き渡つた。老ひも若きも男も女も、

一目なりとも生菩薩を拜みたいと毎日幾萬の人間が新町の井筒屋を指して繰込んだ爲めに道頓堀の芝居小屋が大打擊を受け數名の委員が井筒屋に文句をつけに行くと云ふ騷ぎ、イヤモウ大阪始まつて以來の大騷ぎを演じた。

あまた繰込み押寄來る色餓鬼共の中で、大阪屈指の大富豪中島屋喜四郎といふ禿茶瓶が、小糸の美しい姿を一目見るや、西洋のキユーピットから銀の矢を胸にグザと射込まれたものと見えて、フラ〳〵と迷ひ込み、朝來て晝來て晩に來て毎晩逢ふたら嬉しかろといふ沸騰點以上の陷り方、簡單明瞭に云へば詰り神聖にして猛烈なる戀をやらかしたのである。戀の奴となつた喜四郎は湯水のやうに眞金を撒き散らし、只管小糸の歡心を買ひ一夜のお情けに浴し奉らんとしたが、小糸はイエースオーライと云はない、變な事でも言はうものなら、開き直つて『私は客席に出て遊興は助けても貞操は切賣しません、私の操は屋の店頭にブラ下つた牛肉や豚肉とは違ひます。抑も遊女なるものは――』と滔々と遊女貞操論を捲き立て、千金萬金を積

んでも客に肌は觸れない。喜四郎さん大阪屈指の富豪でありながら、一華魁小糸に振飛されて退却したとあつては世間に顏向けが出來ないのみならず先祖に對しても申譯ないと、妙な處に力味出し、身代金千兩を積んで落籍しようと云ひ出した。小糸は落籍されても一件の方は眞平御免を蒙るがそれでもよければ落籍されてあげませうと云ふ。其氣象に惚れ込んだと喜四郎負惜みを云つて小糸を落籍し、今宮の別莊に女中を附けて住はせた。喜匹郎は楠公が立籠つた天險の要害、難攻不落の名城金剛山も足利勢の根氣强い攻擊には落城した、又一夫守れば萬卒破り難しと稱された旅順の大要塞も乃木將軍の間斷なき攻擊には遂に陷落せざるを得なかつた。小糸城如何に金城鐵壁なればとて玉は既に我甕中に在り、日に夜に攻擊せばなど落城せざることあらんや、精神一到何事か成らざらんとは此處の事だと、手を替へ品を更へ小糸を口說いて見たが、小糸城の鐵壁は頑として微裂をも生じなかつた。振られて歸る果報者、喜四郎大盡遂に果報者のチャンピオンたらざるを得なかつた。

其年も暮れた。昨日の鬼が禮に來た正月もソコ〳〵に經つて三月の末つ方、庭の山櫻が風なきにホロ〳〵と散る夕、小糸が住居の生垣の外で只ならぬ物音、小糸は何事かと緣先に出て見ると武士同士の喧嘩らしい、其中に二三人斬倒されたものと見えて、ムー殘念、キヤツ、どたり、ばたり倒れる音曉きの聲、叫び聲が聞えた、間もなく柴折戸を開けて這入つて來た一人の若侍、見れば血汐滴る一刀を右手に提げて居る、小糸の姿を認めて庭石に手を突き、『無斷でお庭先へ足を踏入れたる段申譯なし、拙者は仔細あつて世を忍ぶ者、只今餘儀なき事より二三人斬伏せ、身を隱す所なく、無禮と知りつゝ驚かせ申した、何卒暫くの間忍ばせ下されたし』と慇懃に頭を下げた。小糸は、『此家は女ばかりなれど決して御心配に及びません』と奥の間に通し、見れば二十歳前後の女にしても見まほしい美男子、小糸は早速自分の着物を着更させ髪も女風に結ひ直した、下女にも人が聞いたら親戚の女が來て居ると云へと云ひ含め、二三日隱して見れば二十前後の、女にしても見まほしい美男子、

容子を聞けば件の若武士は、和泉國郡山の藩士で別所春之助と云ふ者で、同藩士宮永源次郎といふ者が兄義左衛門を暗殺して逐電したので、大阪城内に逃げ込んでは居るまいかと、大阪へ來て容子を探つて見ると、果せるかな宮本典膳と變名して城内の松平伯耆守の家來になつて居ることが分つた、そこで彼れが城外に出た所を討取らうと狙つて居ると、今日今宮で十四五人連れの武士の中に敵源次郎が混つて居るのを發見したか、源次郎は連れの大勢と語つて春之助を返り討ちにしようとした。春之助は弱年なれど心蔭流の達人、忽ち四五人を斬伏せ三四人に重傷を負はせた、源次郎は此勢に恐れて隙を見て逃げてしまつた。斬伏せたのが敵源次郎一人であれば兎に角、伯耆守の家來を四五人も斬倒したのであるから、愚圖々々して奉行の手先に捕まれば事面倒、一時姿を隱す外はないと、扨てこそ小糸の住居の庭先に無斷で這入つたのであることが分つた。

小糸の義俠心は猛然と擡頭した。『宜しい能く解りました、私がお引受した以上城

内の武士たりとも指一本さゝせは致しません』と早速自分の着物を着せ髪も若衆髪に結び直し、二三日奥座敷に置いて、高麗橋の天神の吉五郎といふ侠客の家へ預けた。源次郎は春之助に附狙はれて居ては、一日でも枕を高くすることが出來ないので同僚の阪部彌十郎其他十數名の助勢を受け、暗撃して殺して仕舞へと春之助の行方を捜索し、天神の吉五郎の家に隠匿はれて居ることを突止め、小糸の偽手紙を以て天王寺へ誘き出した。小糸はこれを聞いてコハ一大事と、手早く身仕度し、父切腹の際譲られた先祖傳來の一刀を提げ、駕籠を飛ばして天王寺へ駈付けて見ると、春之助は十四五人に取り圍まれ、將に血の雨を降らさうとして居る所、小糸は野次馬を押分けて中へ飛込み、『ヤー卑法未練な城内の我樂多武士、女の偽手紙を以て春之助殿を誘き出し、大勢を恃んで返り討にせんとは言語同斷、見下げ果てたる閉口垂れ武士共、女ながらも井筒屋小糸、岡山池田の家臣澤井主膳が遺兒澤井信、義によつて春之助殿に助太刀致す、イデ八重垣流の小太刀の切味引導代りに賞翫せよ』

と言ひも終らず手近に居た二三人を吁と云ふ間に斬倒した。ソレ女郎も小僧も腑にせよと八方より斬込んで來るのを、春之助小糸兩人で苦もなく斬伏せ斬倒し、暫く中に七八人を斬り倒した、彌十郎源次郎コハ敵はじと隙を見て逃げやうとするを春之助は飛び込んで源次郎の背後から袈裟掛けに斬倒した。其處へ天神の吉五郎は五六十人の子分を引連れて應援に駈け、更に喧嘩は大きくなつた。

其處へ町奉行北條安房守手附栗島忠太夫組下を引連れ、馬を煽つて馳せつけた、生き殘つた對手の武士と春之助小糸兩人及天神の吉五郎は奉行所へ連れて行かれた奉行安房守の取調べによつて一切の事情判明し、春之助は兄の敵を討つたのでお構ひなし。宮永源次郎は殺され損ひ死骸は取り棄て。阪部彌十郎は惡人に助勢して春之助を殺さんとしたる段不届千萬とあつて食祿を取上げた上阿房拂ひ。其他の加擔者も同斷。小糸と吉五郎は義によつての助太刀であるが、城内を武士を多勢殺した罪は其儘に棄て置く譯にも行かぬとあつて西島へ流罪の宣告を受けた。西島へ流罪

と云へば大袈裟であるが、西島は大阪市内で、奉行の別宅へ引取られた迄の事、半月經つて赦免となつた。隨分人を馬鹿にした奉行樣であるが、斯うして置けば名目も立つからである。

春之助は非常に喜んで池田家へ歸參した。此事件以來小糸の俠名は俄然大阪一圓に響き渡り辨天俠客、生菩薩俠客などとヤンヤの大優待、奉行安房守は小糸最負の第一人者となり、松平伯耆守も小糸の俠骨を愛して城内出入を許し、城内の武士も途中で小糸に遇へば路を讓るといふ有樣。忽ちの中に浪華隨一の女俠客となつた。斯うなると金の千兩や二千兩は御入用の時は何時でも御使ひ下さいと云ふものが四方から降るやうに出て來る。小糸は或小糸崇拜者の寄附金を以て千兩の身受金はちやんと耳を揃へて喜四郎に返した。流石のデレ助親爺も今更の如く驚き且つ其人格に敬服せざるを得なかつた。喜四郎も大阪屈指の大富豪である、相手は名聲嘖々たる小糸姐さんである、客な眞似をすれば一代の笑物になるので、今宮の別莊は奥斗

をつけて小糸に進呈奉つた。

郡山の藩主柳澤侯は春之助よりの委細の申立によつて非常に感服し、辭を卑ふして小糸を招いた。小糸も一城一國の主から叮嚀のお招き、强て辭退するは却つて失禮と招かれるまゝに、行つて見ると豈圖らんや父切腹の原因たる茄子の茶入がちやんと柳澤侯のお手許に在る。小糸は仔細を申立て茶入を無條件で頂戴し、舊主池田家へ納めた。功によつて澤井家再興の恩命があつたが小糸で奉公は出來ないので二百石の祿を受け澤井家の名蹟を立て自分は相變らず女俠客を以て一代を終る決心を申上げ、漂然と岡山を去り、大阪に出て玉緣の編笠に美しい顔を隱し、俠魂義魄に花を咲かせて世を終つた。

今では前記日本の極樂の遊廓地新地街八丁目に筒井筒といふ女郎屋を出し、女將として納まつて居るが、毎晩華魁賣切の大繁昌で、數百萬の身代になつて居るさうである。

小櫻仙太

戸籍抄本

原籍地　上野國安中

現住所　日本の極樂俠客横町小櫻新道

婆婆での職業　初め武士後俠客　内職博奕打

本名　菊地菊太郎

右抄本は戸籍の原本と相違なきことを認證す。

地獄極樂の戸籍吏　閻魔大王印

婆婆の戸籍吏　板倉伊豫守印

戸籍抄本記載の通り上州安中が原籍地で、三萬石板倉伊豫守の家臣、本名は菊池

菊太郎と云ひ十九歳の時に今井流の劍術の免許皆傳を得た程の前途有望の青年であつたが、若い時は二度なしで放蕩に身を持崩し、ヘヾレケになつては、親の財産當にすりや藥罐頭が邪魔になると喇叭節を詠ひ、親の意見を馬耳東風と聞流した爲め勘當されて浪々の身となり、江戸へ出て町人となり、淺草茅町の大黒屋といふ呉服屋へ奉公した。處が大小を差して左樣然らばの切口上で居たものが一足飛びに一夜漬けの町人になつたのであるから、到底碌な事の出來やう筈がない。三尺の秋水を振廻して人の雁首を叩き落したり、胴斬り袈裟斬り車斬りなどの曲斬り藝當は出來ても、前垂掛けで呉服屋の店頭に座り、ペコ〳〵叩頭をしてお客樣の御機嫌を取るなとの算盤玉から割出した町人藝當は三年鯱鉾立しても出來つこはない。遂々お拂箱になつて元の木阿彌の浮浪人。

散々放浪生活をした末、武藏國で有名な長脇差、博奕打の親分玉椿峯右衞門の子分となり、名も仙太と長脇差風に改め、脊中から胸から兩腕へかけて眞白な肌一面

に小櫻の朱入りの文身を入れた。これが有名になつて小櫻仙太が通名になつてしまつた。

親分玉椿峯右衛門が、盃の上の經違から、中仙道本莊の早瀧の重五郎、熊谷の三五郎、深谷の小金七之助、雲龍の岩吉、浪人大枝大之進等の爲めに小佛峠で殺されて以來、峰右衛門の一子峰五郎、峰右衛門の一の子分の甲州屋白太郎と三人で、親分の敵討に出かけ、仙太は武州八王子横山宿絹絲商人仙吉と假稱して諸國を經廻り五年間苦心慘憺を嘗めて浪人大枝大之進を伊勢の龜山で討取つたを皮切りに他の四人の敵を討取り、親分の無念を晴した。最後の敵討までには、彼は七年餘り諸國を流浪し、幾度か死生の間を往來したのであつた。

元來が武家出身の俠客であるから、腕は並優れて出來る、血もあり涙もある、名は小櫻仙太と云ひ、天下禁の博奕を打つて渡世としても、其精神は天晴の平民武士であつた。武士は武士でも經節と云ふやうな我樂多武士などの遠く及ぶ所でなか

つた。

今では俠客横丁小櫻新道に銘酒屋を出し、白首の七八人も置いて、宜しくやつて居るさうである。寛政年間に腕を鳴らした小櫻仙太君が冥土で白首屋を開業して居るとはナカ〳〵振つて居る。然し主人が俠客であるからビール一本飲まして置いて五拾錢以上もふん奪るなどの暴利方はしないさうだ。

回般若坊強覺

俠客と云へば幡隨院長兵衛か花川戸助六より外には無いものゝやうに心得て居る者には、般若坊強覺などと云つても鞍馬山の墮落坊主としか受取れまいが、是れでも天保八年大鹽平八郎がデモクラシーの大運動をやらかし、當時の大阪城代土井大炊頭を始め、東町奉行跡部山城守、西町奉行堀伊賀守などの役人原は勿論、大阪の富豪連の度膽を抜いた大騒動の時に、大塩の幕下となつて獅子奮迅、跡部山城守の